始

724-222

臺督と人畫

大正
3. 6. 19
内交

はしがき

耶蘇基督は我等の救主なり、我が生命の生命、靈の靈なり。人生の經驗に於て一歩を進むるは一歩多く基督を知る機會なり。基督を知るは人生の經驗の意義を明にし、心靈界の大なる王國に於て小き我の立てる地點を知る所以なり。我が信仰淺く經驗狹し。之に映せる救主の姿おのづから偏せざるを得ず。ただ一片君を愛し慕ふ心あり、何事も彼の與ふる光に照して觀じ、彼の精神に浸して味はんとする願あり。感謝す神は歩み遲き者をさへ導きて未だ見ざりし所を見ることを得せしめ給ふことを。此の書を校じつゝある中にも、我が家に有りし別離の悲みは新なる地に立てる救主の姿を偲ばしめぬ。讀者此の書に求むるに系統ある議論と徹底せる見解と新奇なる知識を以てせば蓋し失望せん。此の一書は寧ろ序曲なり、本論にあらず、描く所は門なり、未だ堂に及ばず。

北文館主葛岡龍吉君余の文章を集めて一書とせんことを勸むるや久し。此の頃偶々思ひ立ち基督と人生なる主意を中心として此の書を成せり。文體一致を缺き、意重複あり、又缺ぐる所あるを免れず、讀者の諒とせられんことを望む。

『福音新報』『宗教及び文藝』『開拓者』『明治の女子』の發行者が曾て此等の諸誌に載せたる文章を用ふることを快諾されたるは謝する所なり。

各篇の終に數字を用ひて其の成りし年月を記す。例へば四十五、二とあるは明治四十五年二月、三、三となるは大正三年三月の意なり。

大正三年五月十六日

柏井園

基督と人生

目次

耶蘇の啓示したる人生の地圖……一
耶蘇の經驗と教育との一致……一九
宗教的經驗に於ける聖書の價値……三三
耶蘇と偕に生きん……四二
肅清の晨……四八
十字架に近く道……五六
永遠の序曲……八六
義務と悲哀……九一

常に在らざる基督……九七
不安に勝たしむる事實……一〇三
新約の血の背景……一〇九
戰ふて歸らん……一一八
耶蘇を知る機會……一二五
基督の死生に根したる道德……一二九
精神的脈絡……一三六
人生觀と歷史哲學……一四八
宗教と國民の情調……一五六
病　氣……一六一
ヨハネ傳の宗教的價値……一七〇
ベルナルドの思想一斑……一九八
鮮明なる意識に原ける建設……二〇四
ポオル・ロイヤアルの學徒……二一八
ロボルトソン傳中の自然……二四五
チャルメルスの信仰の轉機……二六三
ヂョルヂ・ハアバアトと田舍牧師の生活……二七六
人格的感化の秘密……二八八

保羅の自傳

一、生ひ立ち……三〇九
二、同　心……三一四
三、同心後の十餘年……三二〇
四、エレサレム行……三二七
五、バウロとペテロ……三三一

目次

六、傳道者……三三四
七、惱みを知れる人……三四一
八、人を懐ふ人……三四九
九、涙の勝利……三五一
十、帝都の囚人……三六一
十一、保羅の祈禱……三七二
十二、戰友の面影……三七八
十三、訣別……三九〇
終

基督と人生

柏井園著

耶蘇の啓示したる人生の地圖

一

今年の夏一夜、青梅在の一村に泊し、多摩川の水の音を聞きながら携へたるゲエテとカアライルの往復書翰集を讀めり。編纂者なる故ノルトン教授の筆に成れる緒言の中に、カアライルが祖先より傳へられたる信條を棄て去りて只己れの道德主義のみを賴りとし、他に海圖なく羅針盤なくして思想の海に漂へる時端なくゲエテの書を讀みしより初めて向ふ所を識り得しことを記しあり。海

圖の一語さま〴〵の聯想を起さしめぬ。今や斷間なく起り來る思想の濤に搖蕩せられ撰んで路を此の間に執らしむべき海圖を有せざるもの何ぞ限あらん。グエテの與ふる人生の海圖之を救ふに足るや。抑も我が主耶蘇基督の授くる人生の海圖は如何なるものなるべきや。余は海圖と云ふよりは地圖と云ふを好むなり。山ある所海にはこれなき彼方此方の界あり。甲武の連山は眼前に眠れり。僅に一嶺を越ゆれば光景全く異なるべし。基督は人生の彼方此方を指示せしにあらずやなど想ひ續けしことあり。其の後此の題目に就きて思想の端緒を逐ひ尋ぬる機會なくして打ち過ぎぬ。されど耶蘇の倫理につきて研究する必要ありて、近頃世に出でたるストオカア博士の「耶蘇の倫理」及びキング校長の著なる同じ名の書（加藤直士君の譯書あり）を讀めり。兩書各々長ずる所ありて有益なる書たるを知るとともに又滿足し難き所あるを思はざるを得ざりき。此の間に浮びたる思想を拾集して此の一文を作しぬ。

余は耶蘇の啓示したる人生の地圖と云ふ。啓示と云ふことにつき言ふべきことなきにあらざれども此は後節に讓り直に本題に入りて耶蘇の啓示したる人生の地圖は畧ぼ如何なるものなるかを觀せんとす。凡そ古より人生につきて正しき敎を垂れたる人の先づ爲せし事は、世の人が人生に處する地圖を有せず、若しくは誤れる地圖を便りとせることを明にする事なりき。人は多く根底なき其時々の心を標準として人間社會の事物を批判し、或は誤れる先入の偏見に支配せらる。いづれも事實に據らず正しき見點を有せざるより誤りに陷れり。耶蘇が凡俗なる人生の批評を批評したる言に曰く「我れ此の世を何に譬へんや童子街に坐し其の侶を呼んで我等笛吹けども汝等躍らず哀をすれども汝等胸うたずと云ふに似たり。そはヨハネ來りて食ふこと飲むことをせざれば鬼に憑かれたるものなりと人々言へり。人の子來りて食ふことをし飲むことを爲れば又食を

嗜み酒を好む人税吏罪ある者の友なりと云ふ。然れど智慧は智慧の子に義とせらる」（馬太十一〇十六—十九）この數節は注意せずして讀まば笛吹く小兒と哀をなす小兒とをヨハネもしくは耶蘇自身にたとへ世人が其の敎に同情無きを嘆ける如く解釋せられ得べけれども、眞意はさにあらず。笛吹くもの哀をなすものは現代の人なり。彼等は眞面目なる一定の志操なく、今婚禮の眞似をなして笛を吹くかと見れば、又直に葬を眞似て哀哭す。其生活兒戲に類せり。然して此の淺墓なる心、一時の氣紛れを原として批判す。人生の地圖をもてる人ならんには蝗蟲と野蜜を食とせるヨハネも、人生の悲喜哀歡を偕にせる耶蘇も其れ〴〵立てる地位あり果たすべき使命あり、山は高く川長く相依れることを觀取し得べきも一定の見解を有せざる人は學ぶべき事を學び得ず。これ凡俗人の生涯にあらずや愚これより大なるはなし。耶蘇は人を救ひ上げて智慧の子たらしめんとせり。

耶蘇は又誤れる人生の地圖を訂正したり。偉大なる政治家の興る時政治界の地圖は一變し、偉大なる財界の英雄出づる時其人は經濟界の地圖を一變す。耶蘇は人生の地圖に於て如何に其色彩を變ぜしや。

人生の地圖に於て先づ普通の人の區別する色彩は大小の差別なり。大國と小國、大都會と小都會、大なる山川と小き山川、これ地理上の圖面に於て先づ區別せらるる所なり。耶蘇も亦人生の地圖に於て大小の差別を指示せり。然れども大小を差別する標準は全く異なるものなりき。曰く「女の生みたる者の中未だバプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき。然ど天國の最小き者も彼よりは大なるなり」（馬太十一〇十一）。夫れバプテマスのヨハネを以て女の生みたる者の中最も大なるものとす。これ既に凡俗の見る所と同じからず。然れどもヨハネは兎に角一世の人心を聳動したる偉丈夫なり。之を偉大と云ふ固より何人も異論あるべからず、然れども天國にて最小なるもの卽ち基督の福音を信ずる弟子の中最も微弱なるものさへも猶ヨハネよりも大なりと云ふ。これ全く大小の差別を

顚倒し人生の評價を一變したるものならずや。且つ又耶蘇は小き境遇小き社會に偉大なるもの尊貴なるものの存することを指示したり。フライタハ其のルウテル傳の中に「ルウテルは人生の小き範圍に於てのみ保存せられ易き所のものを能く維持したり」と云ひしが、移して以て耶蘇に適用するを得べし。耶蘇も亦小き社會に發見すべくして大なる社會貴き階級に是れなき偉大なるもの有るを知れり。ただ知りしのみに止まらずして己が人格のうちに之を維持したり。例へば相互に助くると云ふ德につきて觀察せよ。狹く貧しき村里に於ては相互に助け合はずして生存すること能はず。友遠方より來りしに其の食卓に供すべき麪包なく夜半隣人の門をたたきて麪包を借ることあり（路加十一〇五以下）。又迷ひし羊を見出し失ひし一枚の銀を見出し得たるが爲に友と隣人を呼び集めて喜ぶ（路十五〇九）。賤が伏屋にかかる美しき人情は宿るなり。然るに當時猶太の上流社會宗教界は此の敦厚なる人情を忘れたり。耶蘇は學者とパリサイ人の僞善を責めて

曰く、「彼等は重く負ひがたき荷を括りて人の肩に負はせ己は一の指をもて之を動かすとすら好まず」（太二十三〇四）と。又善きサマリヤ人の物語を見ても或人の强盜に打ちたたかれて倒れたるを祭司もレビ人も之を見ながら其のまま過ぎ行きしことを載せたり。固より假作なるも猶ほ當時の宗教家たるものの人情紙の如きを見るに足る。耶蘇はエルサレムの祭司の社會にこれなくしてナザレの村里に見出さるべき事實を取り出でて之に道德的品價を附與したり。隣人同士の間よりも一層狹くして然かも深き道德の實現を見るは家族なり。愛すること、與ふること赦すこと、敬ふこと、愛するものの爲に苦むこと此等は家族の間に於て實現せられたる道德にあらずや。耶蘇が大とし小となす所のものは形と分量に由らず、大なる精神の宿る所、大なるものに身を献ずる所、小なりと雖も猶大なるなり。これ實に人を鼓舞振興する人生觀にあらずや。オイッケンの云へる如く「基督教的生活は內部的にして且つ柔なるものなるに係らず、其のうちに一種英

雄的なる性質を有す。然れども基督教の英雄主義は古代の英雄主義と根本的に異なりて內部的性質の英雄主義なり、單純なる人道の英雄主義なり。小事に於て勇ましきことなり、喜ばしき信仰と遲疑せざる犧牲より生ずる偉大なり」

耶蘇の立てたる大小の區別は人生の實際に適合せざるものなるや。決して然らず。歷史は之を證明す。蓋世の英雄なるシイザルの雄圖今は悵として己めり。然れどもガリラヤの賤民なる耶蘇をはじめペテロ、ヨハネの事業は如何。シイザルに宿りたるものよりもペテロ、ヨハネに宿りたるものは大なりしなり。ミルトンは博學宏辭の大詩人なり。バンヤンは聖書と殉教者傳の外多くの知識を有せざる鑄掛師なり。然れども偉大なる精神の宿る所此の二人をして等しく不朽なる文學の宮に坐せしむるにあらずや。

人生の他の大なる區別は善と惡となり。耶蘇は善てふ事は唯一なる神の性にして(馬可十〇十八)善惡の境界儼として亂るべからざるとを敎へたり。然れども世人の

區分したる分界とは頗る異れり。

耶蘇は己が傳道せる諸邑の悔改めざるを責め嘆じて云へり「ああ禍なる哉ベテサイダよ汝等の中に行れし異能を若しツロとシドンに行ひしならば彼等は早く麻を着灰を蒙りて悔改めしなるべし。我れ汝等に告げん審判の日にはツロとシドンの刑罰は汝等よりも却て易からん。既に天に擧げられしカペナウンよ復陰府(よみ)に落さるべしそは汝等に行ひし異能を若しソドムに行ひしならば今日までも尙ほ保ちしならん」(太十一〇二十一、二十三)。當時の猶太人はコラジンやベテサイダやカペナウンは異邦の市罪の都なるツロ、シドン、昔のソドムとは全く別格に屬せる者にして如何に墮落するも、悔い改めずとも「腐つても鯛」神の選民の住ふ邑なりと自ら恃みたり。安ぞ知らん耶蘇の地圖の上にはコラジン、ベテサイダはツロ、シドンに劣るとも優る所なかりしを。バリサイ人や學者は稅吏や罪人や異邦人と別の國に屬し如何に腐敗するも彼等と選を異にするものと思ひ居たり。然

れども税吏や娼妓も悔改めなばパリサイ人よりも先ちて神の國に入る事を得ん（馬太二十一、三十一）。されば胸をうちて神よ罪人なる我を憐みたまへと祈りたる税吏の祈りは傲然自ら足れりとして傲り顔に神に祈りたるパリサイ人の祈りよりも神に受けられたりき（路加十八、九―十四）。狡猾にして姦智に長けたる番頭の譬喩をまうけて、其の姦惡は憎むべきも、其苦心慘憺たる所に取るべき所ありとし「この世の子輩は此の世に於ては光の子輩よりも尤も巧なり」と稱賛したまへり（路加十六、一―八）。進んで惡事を爲さずとも怠れる者勉めざる者熱心ならざる者は「惡しく且つ惰れる僕なり」と譴責せられたり（馬太二十五、二十六）。信仰の生活は城を築くに似たり費決して小ならず。又軍を興すに似たり。我が壹萬人を以て彼の貳萬人に當らざるべからず、覺悟と思慮と計畫を要す。之なくして草卒に事を爲すものは人の物笑となるべきを警めたり（路加十四、二―十八、三十五）。然して勵む者初めて能く天國を取り得べきを敎へたり（馬太十一、十二）。

此れ亦人生の事實と嚴密に一致せるものにあらずや。人生は流動す。市區改正の結果として昨日まで裏町なりし所忽ち車馬絡繹たる大路となり、繁華の巷も往來少く寂れ行くなり。榮枯盛衰は循環して休む時なく、多くの後なるものは先きに、先なるものは後となる、これ人生の活ける地圖に非ずや。生命を失へる希臘人の基督敎はコオランと劒を提げて戰ひしアラビヤ人に蹂躙せられ了りぬ。勉めざる善人は勉むる惡人に破られ、品性の善を以て敬はれし人も勉めて德を修めて進歩向上せずんば香りなき花の如くならん。耶蘇の倫理は此の事實を離れず。

要するに耶蘇の敎によれば善の生命は向上心なり。彼の示す人生の地圖は平面的にあらずして立體的なり。此の特色は爾來基督敎國の倫理觀に刻まれたり今日の基督敎國に實際行はるる道德は果して基督敎的なるや。これ重大なる問題なるが、デウキー敎授は先年この點に於て意見を述べ、今日の歐米人の道德

は向上心を尙ぶ。此の一事は希臘羅馬人の道德になかりし所にして基督敎的の道德なりと云へり。「高山は仰き景行は行く到る能はずと雖も尙ほ心之に景仕す」。向上心は基督敎以外にこれなしと云ふに非ず然れども基督敎の如く之れに道德的價値を付するものあらず。人生を未成品と見て常に向上發展して理想を追求する所に人生の趣味を發見す。これ基督敎の藝術とクラシカルの藝術との大なる相違にあらずや。

吾等は最早簡單ならざるべからず。人生の地圖に於ける第三の色分は苦と樂となり、福と禍となり。富める者、健康なるもの、成功せるものは樂しく幸なり。貧しきもの、病める者、人生の失敗者は苦くして不幸なりこれ世人の作れる地圖なれども人生の眞相を解釋するに足らず。富める者必ずしも幸福ならず、貧しき者必ずしも不幸ならず。耶蘇の地圖は之と異なり。神と結び合ふ所最大の幸福あり、歡喜あり、神を離るる所不安あり、苦痛あり。

最後の大なる區分は生と死なり。墳墓の外は生の領分にして墳墓の內は死の王國なりとは、普通の人の地圖なり。然れども耶蘇の見る所を以てすれば死者を葬れる人にして死せる者あり（馬太八〇、二十二）。生命を得んとするものは之を喪ひ生命を失ふものは之を得べし。死中生あり生中死あり、墳墓の內外は假の境目に過ぎず、別に越え難き淵あり（路加十六、二十六）。神に連る所生命あり神を離るる所死あり。

三

是の如く耶蘇の示し給ひし人生の地圖の色彩を點檢し來りて我等は二の要素の常に存在するを見る。一は啓示なり、二は事實なり。耶蘇の道德は徒に主觀的ならず、抽象的ならず、人生の事實を解釋し、又之に適合せり。理想なくしてただ實際の世界の事物にのみ注意してこの世を渡る人却て人生の事實に徹せず徒に現象にのみ拘はりて事實を見る眼なし。道德家を以て自ら居るもの、亦固

定せる人生觀を守りて流動せる人生の消息に通するものにあらず。いづれも人生最深の事實を避けて主觀の小天地を造り其の中に住むものなり。耶蘇は人生に處して如何なる事實をも見るを避けず、又之を踏んで懼れざりき。リヴイングストオン、スタンレエが暗黑なる亞弗利加大陸を踏査し、ナンセン、フランクリン以來幾多の冒險家が南北極地に侵入して世界の全地圖次第に明になれり。耶蘇は人生の最險最難の地を踏めり。ナザレの生活に於て如何に深切に人生の事實に接せしぞ。病も貧も罪も苦も彼は親しく其味を嘗め給へり。然して四十日の荒野に於ける誘惑より十字架に至るまでの行程は實に人生の最も險惡なる路程なりしなり。耶蘇の敎訓のあらゆる部分は人生實生活の呼吸を以て鼓動せるにあらずや。

第二は啓示なり。耶蘇の敎は事實を離れず、然れども單に事實を語るにあらず、啓示の光に照して觀たる事實を語る。彼の神觀も人生觀倫理觀ともに啓示

なり。耶蘇の倫理を說く人何が故により多く此の點を主張せざるや。キング博士は曰く「耶蘇の倫理的宗敎的敎訓の全般は單一なる思想卽ち神を父とする信仰より發す。彼の敎ふる所はすべて己の孝心の直接の反射ならざるはなし。(中略)神は父なりとの此思想、世界の中心に愛ありとの確信をば耶蘇は人生の各範圍に及ぼして論理の歸着する所まで推し進めたるのみ。彼の敎の他の部分は單に此等の論理的結論の詳說と適用なりと見做すことを得べし」(二七〇、二七一頁)と。敢て言葉咎めを爲す譯にあらざれども穩當ならずと思はるるは神は父なりと云ふ思想をば、論理の前提、推論の起點の如く說かれしにあり。思ふに是れは一個の前提起點にあらず、總てのものを包容せる啓示にあらずや。日光の照す所空氣の包む所草おのづから生じ花おのづから咲けり。花と草とは日光空氣の結論にあらず。人生と道德に關する耶蘇のさまざまの貴き思想は神は父なりとの思想を起點として割り出されしや。耶蘇の神は是くの如き神にあらず。人格的の生

命爛熳として天地に充溢し八紘に光被せり。ウォーカアが「基督の教訓」の中に言へる如し、「我等は彼(神)を最高なる道德的統治者或は權威或は大なる立法者の如く語るを避くること能はず、然れども此等の觀念は實際餘りに外部的なり彼は寧ろ大なる鼓吹者なり、我等の靈の靈、我等の生命の生命なり」と。是の如き神なれば、此の神を敎ふる敎は一の啓示たらざるを得ず。耶蘇自身の經驗を見るに彼は推論して神に達し、神の觀念より推論して人道を觀ぜしにあらず「父我に居り我父に居る」と云ひ給ひし如く、神の大なる光と生命の裡に活きたり。十二歳の時エルサルムの宮にて母に對ひて「我は我が父の家に居るべきを知らざるか」と云ひし昔より、十字架の上に於て「父よ我が靈を汝の手に托ぬ」と云ひて息絶え給ひし瞬間に至るまで「我が父」てふ美しき名は其の靈を離れざりき。されば彼が神の事を人に敎ふるに當りても論せず假定せず、親しく見たる所實驗したる所を人に指示したり。然して彼に啓示したる天父は亦た彼の敎育の下に

ある弟子に啓示を與へつつあることを信じたり。ペテロに向ひて「ヨナのシモン汝は福なり血肉汝に示せるに非ず天に在ます我が父なり」(馬太十六、十七)と云ひし言之を見るべし。

啓示てふ思想大なり。啓示てふ思想の眞髓は與へらるると云ふ觀念にあり。みづから小天地を作りて之に入るにあらずして、言にも思ひにも及ばぬ大なる世界大なる事實の一端を示さるるなり。ここに驚きあり、畏れあり。科學者ヘルムホルツは己の發明につきて「我に與へられたり」と云へり。まして啓示は宗敎の領分に於ては更に重要なる思想なり。

四

顧みて我が國人心の要求と向ふ所を察するに少くとも二の事實に接す。一は事實もしくは現實を求むる心なり。科學の時代には必然の要求にして文藝の方面には兎に角自然派の小說家によりて唱へられ試みられたる所なり。一は感興

を求め感激を求め靈感を求むる傾向なり。單に事實現實を求めたりとも又縱しに求めて之を得たりとも、人生の興味と感興と希望は必ずしも見出さるべきものにあらず。是に於て他方には此缺陷を充し得る者を求めんとす。何物か現在を超脱し我を忘れ我を献ずるものを見出さんとす。これ必然の要求なり。然れども平坦なる日々の生活以上に之を求めんとす。終に夢幻に終らざる人は幸なり。結局我等の求むる所、求めざるべからざるものは事實の啓示なり、啓示せられたる事實なり、インスパイヤせられたる現實なり。基督教徒は之を有す。然れども自覺鮮明ならず、啓示なくインスピレーションなき宗教生活に倦まんとす。我等は新に人生の地圖を啓示せられ、沈着にして且つ熱烈なる精神を以て世に處すべきにあらずや。（四五、三）

耶蘇の經驗と教育との一致

一

茲に耶蘇の教育と云ふは耶蘇が弟子に與へ給ふた教育と云ふ意味である。彼が自から經驗せる所と人を教育せる所と一致し聯關せる一班を覗ひたいと云ふのが此の一文の目的である。固より此事の全局面に亘つて研究する考へではない、ただ實際我等が耶蘇の教育を受け其の御足跡に隨ふて進む栞を得たい主意である。我々は成るべく豐富なる宗教的生命を養ひたく願ふとともに、豐富であつて多端でなく、單純なる端緒を捉へ得て、夫れから夫れと樂んで順序を履んで行くやうにありたい是れ苟くも道に志す人の誰しも願ふ所であらうと信ずる。

耶蘇の教育は隨分竣嚴である。權威を以て人を鞭策し訓練する。然れども又頗る自然に合する所がある。必然の理路を逐ふ所がある。すべて偉大なるもの

眞實なるものは此の二の特徴を具へて居る。事實と云ふものは何でも嚴しいものであつて又何處か柔で無理の行かぬ所があるものである。耶蘇の教育は天地間の大事實である。然して彼が神から受けた教育と云ふ事實に根ざしたものであると信ずる。是に於て兩々相照して我等の思索に光に注ぐのである。

若し仔細に馬太傳第三章第十三節以下の耶蘇の洗禮及び誘惑の記事と同第十六章の物語を讀み合はすならば其の間に脈絡深く相通ふ所があるを發見するであらう。且つ耶蘇の教育も亦其の經驗を離れたものでなく經驗の一部分であることを見るであらう。

二

耶蘇を動してナザレの住居を立ち出でしめヨルダン河に來つてヨハネから洗禮を受ける事に心を決せしめたものは何であるか。何か特別な神の啓示があつたからであるか。或はさうであつたかも知れぬが、必ずしもさうであるを要せぬ

と思ふ。後パリサイとサドカイの人が耶蘇に天の休徴を見せよと求めた時、彼は何と答へられたか。「汝等夕には夕紅に由りて晴ならんと言ひ晨には朝紅又曇に由りて今日は雨ならんと云ふ僞善者よ空の景色を別つことを知りて時の休徴を別ち能はざるか」と。耶蘇の考へは何時でも積極的で且健全である。何も天から火が降るやうな事はなくとも思慮判斷を用ゐ、活眼を開いて神の意志を目の前の事實に見出だし起つべしと信ずる時は起つのである。彼は幾度か「我が時」と云ふ事を云はれた。今やバプテスマのヨハネが猶太の野に叫んだ結果人心大に動いて居る。「人々勵んで天國を取らんとして居る。」待ちに待つた曉が近いたやうに思はれる。これ卽ち天の休徴でないか。彼は人熱する時に冷く人動く時に批評的の態度を執る人でない。「我等に敵たはざる者は我等に屬く者なり」(可九〇 四十)と云はれたことを見てもわかる。又或る事をして居る人の人格如何と云ふ事よりも其の人の爲て居る事が義しいか義しくないかと云ふ事に重きを置か

れたやうである。バプテスマのヨハネが謙遜して耶蘇に洗禮するを辭したとき「暫く許せ是く總ての義しき事は我等盡すべきなり」と云はれたを見ても其精神が分る。苟も公平で同情の厚い心を以て事に臨むならば冷い心も溫めらるる。今日我等の周圍に現れて居る時の休徵は如何なるものであるか。敎會の內には今年こそはと云ふ希望が多くの人の心に動いて居り、外には宗敎的の要求復た漸く切ならんとする兆候を見る。一體に自由進步の春潮滔々として廟朝の內をも浸さんとし、基督敎會の立てる境遇も亦大に變せんとして居る。これ我等が徹頭徹尾積極的の態度を執つて進むべき秋である。苟くも何處かに新しい生命が動いて來るならば其の形式の如何を問はず、我等は同情を以て之を迎へ之を研究すべきはずである。モーセはイスラエルの民に云つた「汝等は此の山を行き回ること既に久し今は北に轉りて進め」と我等も今此の聲を聽く。

三

夫れ耶蘇は何故ヨハネから洗禮を受くるを義しき事とせられたか。ヨハネの洗禮は悔改の洗禮である。然るに我等は罪の意識絕えて耶蘇に無かつたことを信ずる。罪の無人が何故洗禮を受けられたか之につきては種々學者の考へもある。或人は說明して云ふには耶蘇は世の罪を負ふメシヤであつて其一生の行には盡く代贖的の意味が籠つて居る。それ故此の時も御自身罪の自覺はなかつたけれども人類の罪を負ひ宛ども罪ある者の如き態度を以て水に入られたであらうと。此の解釋には深い所があるけれども餘り深く說き過ぎて居るかと思はれる。意識の發展と云ふ事を無視して居る嫌がある。これは寧ろ耶蘇が身を神に獻じ給ふた「コンセクレーション」を示したものと考へるが單純であると思ふ。何人の洗禮にも獻身と云ふ積極的の意味はたしかに有る。耶蘇の場合では此の一面が主となつて居ると信ずる。

神に身を獻ずると云ふは色々意味もあるけれども、神を我が心の主とする、

我が生活の根底とすること即ち我が身を神のものにすることであると思ふ。論語であつたか君子不器と云ふ言がある。大なる人格は調法な器でない。君子でさへ器でないならば、まして神は我等の器とすべきものでない。神を取つて我等の品性修養の爲に用ゐ或は心の慰安の爲となす、神は之を救すべしと雖も、未だ神に對する適當の態度ではない。神を取るでなく神に取らるゝ、神を愛するより先に神の我等を愛するを知る、これが聖書に敎へてある正しき道である。これが信仰と修養の違ふ所である。眞の宗敎的修養の道は所謂修養の道と絶緣するから始まる。神を我が心の主とし中心として一切の秩序を建て直して行く所に神の國は存する。これが耶蘇の新しい生活に入られた經驗の第一歩であつた如く、弟子を敎育せらるゝにも先づ此れを端緒とせられたやうである。山の上の說敎の中にも「汝等神と財に兼ね事ふること能はず」と云ひ、又「汝等神の國と其の義しきを求めよ、されば此等のものは汝等に加らるべし」と云ひ

又敎へられた祈の中にも「御名を崇めさせたまへ御國を來らせたまへ御心の天に成る如く地にも成しめたまへ」と云ふことを第一に置かれた。悔改めを促す時でもたゞ「悔改めよ」と云はれぬ「神の國は近けり悔改めよ」と云はれた。他日ペテロを叱られた時には「汝は神の事は思はず反て人の事を思ふ」と云はれた。

耶蘇は斯かる主意を以て身を神に捧げ給ふた。其の結果如何になり行くかは自らも先の先まで見透されたのではなく、信仰を以て神に信賴して命を待ちたまふたであらう。其の結果は如何であつたか。天は開けた、聖靈は降つた、神の聲は聞えた。然して彼は全く新しき天地に入つた、新しき活動の使命は授けられた。メシヤであると云ふ意識茲に初めて出來たでないにしても初めて明に確になつたことは疑を容れぬ。彼が決然身を神に獻じて神の命なれば何事にても爲すと云ふ志定つた時、新鮮なる生命は湧き出てた。生命を失ふ者生命を得た

のである。

四

新しい生命が出來て來た時、新しい敵は發見せらるる。彼は惡魔の試みを受くべく野に入られた。

靈的經驗の路は一樣でない。或る人に取つては敵は咫尺の間に攻め寄せて來て居る。「噫我れ惱める人なるかな」と叫んだパウロの如き人は、初から始末をつけなければならぬ敵が壘を壓し來て、戰ふべき敵は始から明てある。斯る人の戰は苦しいけれども事が明白で容易い點がある。基督の戰は罪との戰ではない此點は丈分違ふのであるが、罪を感じ之が爲に煩悶して「救はれん爲に何を爲すべきか」と尋ねて居る人もあるが、しかしさまで罪を感じない人も多い。これ等の人に强ひて罪を感ぜよと云つても痛くない腹を探らるゝやうな氣がするに違ひない。是に至つて耶蘇の經驗は實に自然である。或る意味に於て人類多

數の寧ろ平凡なる側の經驗を代表せられたと云ひ得る所がある。彼がヨルダン河に來り給ふた時既に戰ふべき敵を見られたか、恐らくはさうでなからう。單純に神に順ひ神の御心を成すと云ふ義務を果す外なかつたであらう。然るに洗禮を受けて新しい天地に入り給ふた。一山を廻つた時、見よ、彼は其處に敵を發見した。こゝが實に面白い處である。罪を感ぜざる人は强ひて罪を感ぜよと云はぬ。然ど先づ身を聖き神に獻じ神を我が靈魂の主となして生活の秩序を建て直さうとする曉には必ず之を壞さうとする敵が現れて來る。新しい生命の若芽を吹き折らうとする嵐が起る。基督を知るは卽ち罪を知る所以である。

耶蘇は野に入つて後敵の其處に待つて居る事は明てあつたが、其の敵は濃霧の裡に包まれた敵のやうなもので其の眞相は直に露呈しなかつた。自分の戰ふべき誘惑はこゝにあると明になつた時は戰の既に進んだ時である。三の誘惑が形をなして來るまでに耶蘇は四十日四十夜食はず飲まずして、濃霧の裡に敵を

探られた。

我等は動もすれば此の霧を避けて神秘的感情の城に隱れやうとするけれども、此時は深刻なる內省の必要な時である。省察の刀を磨て眞相に徹せずんば己まざる勇氣がほしいものである。

耶蘇は弟子に向つて「パリサイ人とサドカイ人の麪酵を謹しめ」と云はれた。基督の精神と相容れない、僞善なるパリサイ人、世俗的なサドカイ人の臭味の雜つて來ぬやうに儼然たる省察と警戒をなすべきを敎へられたものである。之を言つて弟子等が良く了解しなかつた時耶蘇は「信仰薄き者よ」と云ひ又「何ぞ悟らざる」と云ふ言を繰り返して警醒せられた（馬太十六〇六——十二）然れども耶蘇は光を携へずして深省の堂に入れよとは云はれない。麪酵の敎を垂れたときも、先づ弟子を伴ふて商賣の盛なツロとシドンの邊から始めてパレステナの境の外なる土地に旅し、高山の麓、淸流の岸、其の眼界を廣くし展望を大にしたる後のことであつた。彼自からもヨルダン河にて神の靈雨に浴して後火の如き苦鬪の裡に飛びこまれたのである。今日の人の、光をもたぬ自己省察とは違ふ。

五

耶蘇は如何にして惡魔の誘惑に勝たれたか。材料から云へば舊約聖書の言を用ゐたが、要するに十字架の精神に因つて勝を得たと信ずる。己れの飢を醫す爲に石を麪包とする自己中心の生活でもなく、己れの思慮分別を用ゐず無法な事をして神を賴む妄信的の生活でもなく、又成功の爲に道義を無視する俗的生活でもなく、ただ人の爲に苦んで犧牲となることによつて世を救はんとする精神玆に定つて復た搖されなかつたのである。

「若し我に從はんと欲ふ者は己を棄て其の十字架を負ひて我に從へ（太十六〇二十四）。耶蘇の命令は極めて明白である。十字架のない處基督敎はない。然れど

も耶蘇は弟子を教育せらるる最初の課程として十字架を説かれなかつた。先づ神の國を説き、次に彼れ自身の人格が漸く弟子等に解せらるるを待つて後徐に此の深き秘義に導きこまれた。これが深き自然に合した順序であると思はれる。ピリピ書第三章を精讀してパウロの宗教的實驗の跡を辿つて見ると、耶蘇を知るには第一着に其の復活の力を知り、其の死に合體して彼の苦に與る事は第二になつて居る。マイヤーが註して云つた如く「基督の杯を飲まうと欲する熱烈な感情は、先づ主によりて復活したと云ふ力ある確信を胸の裡に有する人でなくてはこれあることが出來ぬ」。

出埃及記にイスラエル人埃及を出て近き地中海邊の路を取らず南の方に遠回りをした譯を記して「さてパロ民を去らしめし時ペリシテ人の地は近かりけれども神彼等を導きて其の地を通りたまはざりき其は民戰爭を見ば悔いて埃及に歸るならんと神思ひたまひたればなり。神紅海の曠野の道より民を導きたま

ふ」（十三〇十七——十八）とある。長い航海をする人が港を乘り出して直に大波にあへば弱るけれども三四日平和な航海を續けて後なれば大抵の濤に逢ふても平氣であり得るやうなものであらう。神は次第に我等を訓練してだん〳〵重い十字架を負ひ得る力を增し加へたまふ。ガリバルヂイ嘗て士卒に訴へて云ふには「余輩が諸君に呈し得べきものは疲勞である、危險である、奮鬪である、死である寒き夜寒風に曝され燒くが如き日光に照りつけらるることである。宿舍も兵糧も彈藥もなく强制的進軍と危險なる歩哨と銃劍を提げて堅壘に向ふことである。ただ自由を愛し己の國を愛する人は我に從へ」と。以太利の兵士は之に從ふた。愛する者の爲には艱難を辭せないのは人の情である。

六

我等の少しばかりの研究は實行的生活の光を見出し得んためであつた。基督に倣ふ道を學ばん爲であつた。今や以上學び來つた課程を總合して試に左の如

き箇條を作つて見た。讀者諸君が同情を以て之を研究し之を訂正して完備したものとなし、實行的生活の方針を立てらるる一助となるを得ば幸である。

(1)耶蘇は先づ神の國の事を敎へ給へり我等も亦人の事を思はず神の事を思ひ、神を我が心の主、我が生活の根底となし身を献じて神の御心を成すを志とし之が爲に祈り且つ努力すべし。

(2)斯くの如くにして朦朧たりし我が心に秩序を生じ、新しき自己を發見し新しき生命萠え出づるとともに、新しき敵を發見すべし。この時目を醒まして祈り堅く心の門を守りて卑しき麪酵の浸入を防ぐべし。

(3)別けても謹んで基督の苦と其十字架を思ひ犧牲の血によりて我が罪を潔められんことを祈るべし。

(4)斯くて日々己に克ち十字架を負ひて基督に從ふならば、新しき生命生長し、天國の鑰は與へられ、喜と感謝と平和に充たさるを得ん。

(5)此の喜あり平和あらば之を人に傳へざらんと欲するも得べけんや。耶蘇は乃ち誘惑の野を出でて傳道に着手せられた。

宗敎的經驗に於ける聖書の價値

總ての事に於て其の本源に遡らんことを欲するは今日人心の要求なり。基督敎を研究するもの直に聖書に接し其のうちに充ちたる原始的創造的勢力に動かされんことを望む。これ我等の認識すべき正當なる要求たらずんばあらず。

然れども聖書をして眞に我等に價値あるものたらしめには、他の本源たる宗敎的經驗に照さざるべからず。聖書が我等の宗敎的經驗に取りて價値ある所これ其の大なる價値の存する所なり。

宗敎的經驗の眞實と其の價値とは今更多言するを竢たず。其の眞實あり得べきことは今日盛に學術的研究の對象とせらるるによりても明なり。其の價値を

云はんか、宗教的經驗は人生の經驗のうち最も根本的なるが故に、他の一切の經驗を統一し、宇宙の靈的意義を感覺する力を與へ、物質的の壓迫に抵抗し得る生命を與ふ。多少の宗教的經驗ある人より見ればこれなき人の生活は內容落寞たる生活なり。更に又少數の人が靈魂の深き處に於て經驗したる所が社會を改造する力の大なるを思へ。宗教的經驗を有する人なきは國家の大なる損失なり。固よりあらゆる宗教的經驗が等しき價値ありと云はざるも、既に宗教的經驗と云ひ得るほどのものは人生に於て價値あるを失はず。

宗教的經驗既に是の如く價値あるものならば、之より發するもの、之に貢献するもの皆價値あるは明白なり。

聖書は宗教的經驗の記錄なり。單にこれのみより成るとは云はず、然れども不朽の生命あり、永に人心に觸るる部分は多くは實驗の記錄なり。其の種類は一にして足らず。國民的經驗あり、個人的經驗あり、個人の經驗にしても、舊

約預言者のうち、イザヤの如くエゼキエルの如く、忽焉として大なる光に接して神の聖きと榮光あると其授くる使命とを感格し得たるものあり。或はホゼヤの如くエレミヤの如く苦き悲痛なる經驗を重ぬる間に歩一歩神の深き御心を學び得たるものあり、或は此の二のもの併せ存するものあり。孰にしても孤獨なる經驗にあらずして、神より與へられ敎へられ啓示せられたる經驗なり。

聖書は我等の宗教的經驗を解釋す。聖書はただ記錄にあらずして地圖なり我等の小き經驗の立てる位置を明にするものは聖書なり。聖書に載する宗教的經驗は千篇一律にあらず。「此星と彼の星と榮各異なり」。さま〳〵の型あり、獨得の色彩あり、同じ人の作にしても例へばパウロの書翰の如き時期によりて發展變化あり。或る一の型のみ正しくして他は皆な變則なりと云はず。聖書に載せられたる經驗の重なる型少くとも三あり。第一は舊約聖書の中心となれる型なり。神の保護攝理祝福と云ふことを思ふと多し。詩篇第二十三に於て、又耶蘇が空

の鳥、野の百合花を假りて與へ給ひし訓に於て其の最も美しき表現を見る。リヴイングストオンが一八四〇年十一月其老親に訣別して阿非利加に赴きし朝朝夙く起きリヴイングスオンは家族とともに詩篇百二十一と百三十五とを讀みて祈りし、父は子を波止場に送りて永き別を告げしと云ふ。「エホバは汝を守りて諸の禍害を免れしめ又の汝の靈魂を守りたまはん、エホバは今より永に汝の出ると入るとを守りたまはん」と云ふ如き語、偉人傳の此の一節を懷ひ出して讀まば一入感興の深きを覺えずや。第二はパウロの羅馬書及びガラテヤ書に最も良く現れたる型にして、罪を悔ひ悲み基督によりて赦と救とを得る恩寵を經驗すること深く、回心の跡最も鮮なり。アウガスチン、ルウテル、バンヤン、ウエスレエの經驗は此の型に屬す。人を感化する力大にして又社會革命の原動力となること最も多き此の種の宗教的經驗の特長なり。第三は之よりも神秘的なり葡萄の枝の其の幹に連る如く、内なる靈的生命が基督によりて神と交通すること

を思ふこと多し。ヨハネの神學は之を代表し又その源をなす。オリゲネスの如きシユライエルマツヘルの如きブシネルの如き此の型に屬すと云ふべきか。宗教思想を豐富にし人心を開發する力あるはこの型の思想に多し。聖書は宗教的經驗にさま〴〵の種類あり得ることを敎ふると同時に、成熟せるものに至りては互に融和接近し得ることを示す。パウロの經驗に於ても神秘的の分子次第に重きを加へ、ヨハネは其性格の見出したる別なる途を經てパウロの味ひしと同じ贖罪の眞理を體得したり。舊約型の信仰亦然り。神の攝理を味ひ經驗するうちに神の敎育によりて次第に十字架の意義を解する方に導かる。遂に新約を經たる舊約に歸るに及び、神の保護攝理の意義精神的なるものとなる。變化のうちに統一あり、基督敎道德が大本に於て一なる如く、基督敎經驗は大本に於て一なり。耶蘇基督なる一の根あり、又一の聖靈によりて養はれたればなり。

是に於て更に重大なる次の個條生ず、卽ち、聖書は宗教的經驗の標準たり權

威たるとなり。たゞ斯くあると云ふ事を示すのみならず斯くあるべしと云ふ事を示す書なり。實驗を重んずる弊は動もすれば標準的の價値を忘れ易し。たゞ客觀的に觀るにあらずして我の裡なる經驗と相觸れ相通ずる所に於て聖書を研究す、これほど愉快なる業はあらじ、確なる見地に立ちて聖書を觀るとき聖書は活ける書となる。これ最も良き事なり。然れども聖書のうち我の小き意識と脈絡相通する處のみを採りて、聖書てふ大なる天地の中に沈潛して新なる我を建設することを勉めずんば不可なり。宜しく我に照して聖書を讀むのみにあらず聖書の中に我を讀まざるべからず、現在の我を超越して新しき我を發見せざるべからず。說敎者は已に引き着けて聖書を解說するのみにあらず、先づ原著者の眞意を研究し已を此の見地に引き上げて見たる所を人に與へざるべからず。我等は日本國民に特有なる氣風と趣味と經驗とによりて泰西人の未だ味ひ得ざる妙境を味ふを得べきことを信ず雖も、未だ我が國民性に發揮せられざる

所を聖書によりて喚起訓練せられざるべからざることを信ず。

レフエカヂオ・ハアンが曾て日本人を批評したる言に曰く、「光につき蒼き色につき無限につき何等の情緒を有せざる人民を想像せよ。彼等は諸君や余の感ずる如く日の美を感じ得ざらん。思へ彼等は富士山を白扇の倒に懸れるに比す。美なる所あり、現實なる所あり、されど如何ばかりの情緒そのうちにあるか。知らず山嶽は加何なる感を此の國民に與ふるか。ヨブが「彼は高き處に平和を施し給ふ」He maketh peace in his high places (二十五 〇二)と云へる如き想はこゝにあらず。光は我等をして祈らんと欲せしめ、その爲に何者かに感謝せしむるものが、其の光は如何なる感を日本人に與ふるか。ヨハネが『神は光なりこは彼より聞きて汝に傳ふる告なり』と云ひし所は彼等に無し」。我等は小泉八雲氏の批評に屈伏するものにあらず、我が國民文學に無限を懷ふ調なしと云はず、然れども崇高、悠遠、純潔なる思想に於て聖書の訓練を要するもの多きこと認めざる

を得ず。

却説宗教的經驗は當に如何にあるべきかと云ふ事につき、聖書は我等に如何なる理想標準を掲ぐるか。三四の點に注意せんとす。(イ)基督教的經驗は道德的精神によりて支配さるべきものなり。此の處汎神教の經驗と異なる所なり。オイツケンの云ひし如し「此の宗教の目的は印度の宗教の如く空の世界より永遠の確實に徹するにあらずして、實在の全體を善と惡との反對の下に觀、愛と慈愛の新しき世界を求む。」正義の觀念を除けば舊約の宗教は骨拔きとなる。罪を赦され罪より淨められんと欲する志なき宗教的經驗は基督教的のものと云ふ能はず。(ロ)基督教的經驗は與へられたる經驗を中心とす、これ修養の道、精力主義の經驗と區別する所なり。みづから小天地を造りて其の中に入るにあらず、大なる天地に導かれ、大なる賜を受くる經驗なり。卽ち救の經驗なり、恩寵の經驗なり、祈禱の經驗なり。之が爲に感恩の念あり、謙遜の德あり、碎けたる魂あり。(ハ)基督教的經驗は基督の弟子としての經驗なり。「人若し我に從はんと欲せば我に仕ふべし、我に仕ふるものは我が居る處に居らん」と耶蘇の云ひし如し。耶蘇の弟子たらんとする努力は歐羅巴中世の宗教の生命元氣を造れり。我等の間にこの點につきて幾何の努力あるか。我等は弟子道につきて聖書より新なる光を得ざるべからず。(ニ)基督教的經驗は多くの人とともに之に參し得る經驗なり。舊約聖書にはイスラエル國民としての深き經驗あり。新約聖書には一の靈によりて與へられたる經驗あり。パウロは「すべての聖徒とともに測るべからざる基督の愛を知る」と云へり。使徒時代の歷史を觀るに大浪の如く萬人の魂に動ける經驗ありき。大なる復興時代の宗教にはこれありき。この點に於て今日我等の狀態は理想と距ること遠しと云はざるべからず。希くば現狀に滿足せず、相共に聖書の與ふる光に導かれて一層調子高き時代を來らす爲に力むる所あらしめよ。(三、三)

耶蘇と偕に生きん

基督者の生活は要するに耶蘇と偕に生くる生活なり。故に耶蘇は「我生くれば汝等も生きん」(ヨハネ傳十四〇十九)と云ひ、保羅も「我等もし基督と偕に死なば又彼と偕に生きんことを信ず」(羅馬書六〇八)と云へり。此等の語に籠れる其れぞれの意味は姑く措き、概して考ふるに耶蘇と偕に生くると云ふ意味を三に分つことを得べし。耶蘇の生きし如く生くると云ふこと其の一なり、耶蘇と偕に在りて生くること其の二なり、耶蘇の生命を與へらるると云ふこと其の三なり。

夫れ耶蘇の生きし如く生くるとは如何なる事なるか。容易(たやす)からぬ問題なり。たゞ一二の點を擧ぐるに止めざるを得ず。耶蘇は生活の根抵につきて大に心を用ひ、枝葉のことにつきては寧ろ淡如として生活したまへり。彼は其の日其の

日の生活をは意味あり興味あるものとして送りたまへり。言ひ難き安住滿足の調子ありき。之をたとふるに良く書を讀む人の心せかず一枚又一枚限りなき樂を以て繙き行くが如し。現在の快樂を追ひ求めず、又強いて之を遠けず。人生の苦惱を避けて之に目を塞ぐことをせざれども又好んで之に身を投ずることをせず。日毎の麵包の爲に祈り又感謝して之を受くれども之が爲に思ひ煩ひし痕なし。執着せず拘泥せず倦怠せず。然らば目的なく計畫なく煩悶なくして淡然世に處せられしかと云にさにあらず。彼は信仰生活を以て城を築くにたとへたり。先づ坐してその建築を完成するだけの資力ありやを量るを要す。又戰を開くが如し。敵に二萬の兵あり、我に壹萬あり、寡を以て衆を擊つの略あるやを講じて後戰を宣すべしと敎へたり(路加十四〇二十八)。生活の計畫遠大にして且つ根本的なり。其の事業に着手するに先ち野に退きて四十日四十夜の苦戰を經たまひぬ。一度根抵に於て苦みし故に其の餘は概して自由に又安靜なるを得たるは當然な

り。世俗の生活は之に反す。根抵につきては漫然苦慮する所なくして、却て苟且の事に悶へ苦しむことゞ多かりける。眞に生活難の爲に泣き居る人なれば物質上の事の爲に思ひ煩ふは猶ほ已むを得ずとするも、比較的生活上餘裕ある人も亦何等精神的の事を考ふることなく世間體を繕ふに汲々たり。習ひ俗を爲して我が國の社會には一種の不自然不經濟なる慣例は果てしもなく生長しつゝあり。

今の時を耶蘇の時代に比すれば世態の變遷多大にして、生活の要件遙かに多端なり。實際耶蘇の如く生くることを得べきか。耶蘇が根本の事につきて心を苦めたまひし如く我等は根本の事につきて苦しむことは實際出來得べきことなるか。耶蘇が生きしと同じ精神を以て生くることは成し得べきことなりと思ふ。彼は決して恬淡無爲にして濟むべき社會に立ちしにあらず。家族の係累もあり、社會の壓迫もあり、教育すべき弟子あり、さま〳〵面倒なる境遇を切り

拔けて苦心慘憺その事を成し天職を果たされしことと察す。耶蘇が單純に自由に平靜なるを得しは生れしまゝの樣にてありしにあらず。その間に戰あり。鍛練を經て後こゝに到達したるものにして、名將名醫の單純に自由に平靜になり得るに似たり。否斯く云ふは餘りに世間の英雄の事を云ふに近し。神に信賴し神の教育を正しく受けこゝに到れりと云ふに如かず。

耶蘇の如く苦まば耶蘇の如く安かにあり得べきは誤なき事なりとするも果して耶蘇の如く苦むことを得るか。庸醫は名醫の驚かざるときに驚き名醫の苦心しつゝある時却つて苦しむを得ずして茫然たるものあるべし。將軍の憂は兵卒の憂にあらず。ブルウタスはピリピの大戰の前夜耿々として眠成らず、陣中琴を彈ぜしめし少年はしきりに睡魔に襲はれて彈く琴の音も亂れがちなりき。耶蘇は血の汗を流して祈りつゝあるに三人の弟子は眠りつゝあり。弱く淺く愚なる我等如何にして耶蘇の如く苦しみ得べき。又これ耶蘇の我等に求むる所にあ

らざるべし。ここに於て耶蘇と偕に生くるの別なる意義なかるべからず。

然らば如何。我等耶蘇の如く生くることを願へども之を爲す力なし。然れども感謝すべきは耶蘇我等と偕に生活したまふことなり。生命は交通なり。生命は生命を生み、生命に觸れて勢力を生ず。耶蘇は啻に光たり理想たるに止らずして、生命なり力なり。代々の基督者は耶蘇我と偕に在りとの信仰により慰めを得たり。或る鐵道の信號手其の屬する敎會の牧師に語りて曰く、我は深夜人なき處に立ちて職務に從ふとき、宛がら晝間我が妻の現在せると同じく、基督我とともに在し給ふを感覺すと(チャーレス、ブラウン氏の說敎)。「我は世の終まで汝等とともに在るなり」と耶蘇の約束せし如く、「主我とともに在りて我に力を與たまへり」と保羅の云ひし如く、此の辛勞多き務を執る人は我れ獨りにあらざることを感じたり。

我等は耶蘇の如く生くること能はずと雖も、少くとも耶蘇とともに生き得る

ことを喜ぶ。士卒は大將の如く苦み喜ぶこと能はざれども大將と偕にありて其苦みと喜びとに與ることを得べし。然かも耶蘇の我等と偕に在るは徒に我等と偕に在るにあらずして我等に何物かを與へんとてなるべし。「我れ汝等の勞せざりし所を穫らせんとて汝等を遣せり、他の人々勞せしにより汝等は其の勞したる實を受けたり」。耶蘇の我等と偕に在るは、耶蘇の如く苦しむこと能はざる我等をして、彼の苦みにより其の喜に與ることを得んが爲めにあらずや。與へらるるものは喜のみにあらず生命なり、生命の恩寵、生命の歡喜なり。「彼に充滿たる其中より受けて恩に恩を加へらる」。ここに宗敎の天地あり福音あり。

然らば耶蘇の與ふる生命とは如何なる性質のものなるや。生命にざま〴〵の種類あり。植物の生命あり、動物の生命あり、人の生命あり。人にして政治家として或は畫家として生命有りとか無くなれりと云ふ。生命に區別差等あるを見るべし。道德的の生命を以て最も貴しとなす。耶蘇我とともに在りて生命を與

ふとは電氣をかくる如き意味にあらず、又勇將の下に弱卒なしと云よりも一層道德的の意味なるべからず。耶蘇の道德の眞髓は犧牲にあり。利己心は人の靈的生命を殺す如く、耶蘇は己を犧牲にして神の聖意を果したることによりて、其の靈的生命を全ふし得たりと云ふべし。故に耶蘇の生命はこれ卽ち神の生命なり。神はその生命を我等に與ふ。

「我等もし神と偕に死なば又神と共に生きんことを信ず」。全く苦み努力することなくして、耶蘇とともに死ぬること難し。言ふことは易くして之を實にすること難し。筆の運び遲々たらざるを得ず。

肅清の晨

路加傳五章一節乃至十一節に載せられたる事實は、馬可傳及び馬太傳に見えたる耶蘇が最初の弟子を招きし話の一層詳なる者と見るべし。たゞヨハネ傳第

二十一章にある耶蘇復活後ありし事實と相似たる節甚だ多きにより、基督傳研究の上より見れば多少の問題を生ずれども、今はかゝる批評的研究と關りなくして、得たる敎訓を學ばんとす。

耶蘇の爲せし事に一々譬喩の意味ありと解するは不可なれども、言外の意おのづから美しき譬喩となれるもの少からず。先づ「澳へ出て網を下して漁れ」とペテロに云はれし一言が多くの說敎者に好き題目を供したるは云ふまでもなし。次にペテロの「師よ我等終夜働きしかど所得なかりき」の一語亦自然人生の努力屢効なき歎を語るものにあらずや。何事によらず我等の蒔く種盡く果を結ぶものにあらず。或は磽地に蒔かれ、或は路の邊に落ちて鳥に喙まる。自然界にも人事にも浪費多し。すべての花人に觀らるゝにあらず、すべての珠飾となるにあらず。學生が學校にて學ぶ所のうち幾許かその記憶に留るや。如何なる職業にても其の大部分は乾燥無味なる仕事を繰り返すに過ぎずして人生の大

目的と相渉るもの少し。我等の宗教生活亦然り。毎日聖書を讀み、毎日曜日教會に出で說教を聽く、この外書を讀み道を學ぶ。勉めざるにあらず。然れども信仰の進歩遲々たり。聞く所學ぶ所にして眞に我がものとなるもの幾何ぞ。ウイリヤム、ケレイは近世宣教史上の偉人なり。然るに彼が印度に行き道を傳ふること七年、その間に一人の信者も起らざりき。己の生活を維持する爲に藍の製造人となり、印度語を學びながら熱心に教を宣べぬ。彼は孤獨の夜、失望の夜働きつゝありしなり。人の勤勞は常に爽快なる晨にのみせられず、屢々困難、迫害、病氣、損失の間に疲る。然れどもマシウアルノルドの歌ひし如く、人は暗黑の裡却つて大なるものを建てつゝあり。やがて晨は來りて其の大なるを顯すべし。

是に於て『されど汝の言に從つて網を下さん』との一轉語あり得べし。耶蘇の命なれば今一度試みざらんや。ペテロの柔和と勇氣とを見るべし。信や柔和

なるものにして地を嗣ぐことを得べし。何の獲物なしと思ひて網を洗ふ時は安ぞ知らん大なる獲物の目近くなりし時なるを。身體の健康を失して氣力銷沈せる後、やがて盛なる氣力をもり反して曾てなき健康の狀態に入ることあり。志ありて手段なく涙を以て岡の上に祈りし時行く手の道は既に開けつゝありしなり

「夜は夜もすがら泣き悲むとも朝には喜び歌はん」（詩三十篇）と舊約の詩人のうたひしは人生の經驗に於て往々ある所。多くの話を聽きては忘れ、幾度か感じては復た醒む。然れどもその中の一粒にても心の畠に根をおろして生長し初むれば、今まで眠りたるもの眼を醒まし、失はれたりと想ひしもの復活して萬木一時に花咲き、荒野は番紅花の如くならん。ケレイは印度に傳道すること七年の後漸く一家族洗禮を受けしが、その後十年間に於ては三千人に洗禮を授けたりと云ふ。是に於て我等は忍んで待つことを要するとともに、神の命令に順ひて、最後の一擊を加ふることを忘るべからず。これなくんば徹底せず。人の書を讀

みて時に思ふ、我等も是の如きことを老へしことあり、たゞ最後の一幕を撞破し得ざりしこそ殘念なれと。信仰の生活に於ても之を缺くが爲に恩寵の水門開かれず。

「魚を圍めること甚だ多く網裂けかゝりければ云々」これ基督の賜の豐富なるを示すものにあらずして何ぞや。常に米國の大説教家フィリップス、ブルックスの説教を聽きし或る人「豐富（リッチネス）」と云へる語のなきことなかりしと云へり。耶蘇は富めり、光に於て、力に於て、愛に於て、救の手段に於て、我等に與ふる經驗に於て其の富限り無し。

以上擧げ來りしさま〴〵の事いづれも味窮りなき教訓を與ふ。然れども教訓暗示の泉は猶ほ竭きず。この賜を受けしペテロの言如何なりしぞ。「主よ我を離れたまへ我は罪人なり」とて、イエスの足下に俯したり。ペテロの人物に於て重厚の資質、活躍の氣象ともに此の一語に現れたり。彼は忽焉として基督の大なる

を見出だすとともに、己の小きを悟れり。基督の聖きに打たるゝとゝもに、自己の汚たるを知れり。謹み且つ畏れ、過分なり勿體なしと云ふ感胸に湧き起りぬ、神の恩寵と其心盡しを知れる時、今一層善きものとなる必要を感ぜざらんや。罪を知りて後赦さるゝを求む、然れども赦されて後ぞ眞の罪の大なるを學ぶ。今日我等は「我は罪人なり」との感を切實にし我等の道德的生活の理想を高尚にすべき時なり。基督教は積極的の生命に充ちたる宗教なり。これあるがために消極的訓練の必要を感ず。或る時は善き事をなすべしと教ふるよりも多く惡しき事を爲す勿れと云ふ方面を高調力説すべきことあり。肅清を急とする時代に於て特に然りとなす。しかも其の由て出づる處は積極的精神に存せざるべからず。如何なる精神を鼓吹し、如何なる中樞を執り守れば道德を高くし道念を振作するを得べきか。これ心して研究すべき問題に屬す。今參考として此の話に因みある三點を擴げんとす。

第一に神の國を擴張する必要なり。大に刈らんとせば先づ鎌を磨ぎ、大敵に對せんとせば先づ規律を振肅す。今年は我が國の傳道大に振はんとする勢ありと云ふ。これ實に喜ぶべし。これあるが爲に我等は益々謙りて我が罪を悔い、大なる獲物を愛けざるべからず。獨逸より歸りし或る官吏の話に、獨逸人は戰勝の如き國運發展の時期を經る毎に益々勤儉を加ふと云ふことありき。一概に云ひ難きも亦中らずとも遠からざるが如し。之に比ぶれば我が國民の風氣如何に輕薄淺見なるぞ。我等基督者は別なる氣風を保ち成功のうち益々抑損神に歸らざるべからず。

第二に、更に深き動機たるべきは感恩の精神なり。聖書を研究せよ、基督我が爲に苦み、我を救はんために死せりとの鮮明なる意識は初代の信者をして罪に遠かり、自ら潔めしめたり。ペテロは曰く「キリスト既に我等のために肉體に苦難を受けたれば汝等も其心を以て自ら鎧ふべしそは肉體に苦みを受けし者

は罪を斷ちたればなり」（ペテロ前書四〇一）。パウロ亦曰く「汝等は價を以て買はれたる者なれば神のものなる汝等身に於ても靈魂に於ても神の榮を顯すべし」（コリント前六〇二）我等は基督の犧牲によりて、驚くべく大なる賜を受けたり。この事實を意識し此の愛に感じて猶ほ自ら覺醒し精進すること能はざるか。

第三に我等には聖く義しき神あり、我等は其の子とせられたり。ペテロは嘗獲し魚の多きに驚きしのみならんや。耶蘇の容貌のうちに聖く尊く神々しき威光を見しによりて「我を離れ給へ」と云ふ心を起せしに非ずや。世の人の犯す罪には思はずしてなす者も多かれども、又無神無靈魂善惡無差別の信條に原けるものなきにあらず。彼等の不道德には哲學的の基礎あり。我等の道德にも徹底したる有神的信念なかるべけんや。（三、三）

十字架に近く道

耶蘇の一生は十字架に近いた生涯であつた。耶蘇を信じ其の教育を受くるものゝ履む道も次第に十字架に近く道である。次第に幸福になつて行く人もあらふ。或は年老いて幾多の悲慘なる經驗を嘗める人もあらふ。しかし茲に十字架に近くと云ふはこれとは別であつて、益々十字架の眞味を解し、犧牲の精神と深醇にして行くことを指すのである。十字架に近くは卽ち神に近く所以である。人生の眞意に近く所以である。今我等は弟子を伴ふて十字架さして進み行きたまふ耶蘇の足跡に追隨したいと思ふ。

深からんと欲せば先づ廣くならねばならぬ。高尙なる理想は狹き心に宿るものでない。耶蘇はガリラヤ湖畔を去つてツロとシドンの境に遊ばれた。

（一）異邦の市のほとり

ツロとシドンはフキニシヤの都府である。ツロはガリラヤ湖邊から直線を引いた距離三十五哩、シドンは其から北二十五哩離れた處に在る。されば里程から云へば東京から江の島あたりに往く位であるが、國が變り宗教が變り、風俗民情まですべて異なつて居る。地勢から云つても此處は地中海に面して天下の國々の船舶の輻輳する津であつた。昔預言者エゼキエルは言を盡してツロの榮華と商賣の盛んな事とを描いた。「汝の國は海の中にあり汝を建つる者汝の美を盡せり。人セニルの樅をもて船板を作り、レバノンより檜を取りて汝の爲に檣を作り、バシヤンの樫をもて汝の槳を作り、キツテムの島より至れる黃楊と象牙を嵌めて汝の坐板を作れり。汝の帆はエジプトより至れる文布にして旗に用ふべし。汝の天遮はエリシヤの島より至れる藍と紫の布なり」と。それから貿易の品をいろ〳〵擧げてある（以西結書第二十七章を讀むべし）。ガリラヤとても必ずしも世界の交通から懸け離れた邊隅ではないが、それでもフキニシヤに出れば又全く別世界

に出た心地がしたてあらう。

我々は自己の内的生活を活潑にし輪廓を鮮明にする爲に時々別なる世界の活動に接し別なる空氣を吸て居る人々と交り立場を異にして居る思想に刺戟せらるる必要がある。然らずば沈滯する恐れがある。耶蘇の此の行專ら弟子の敎育の爲めである。精神を開發し鍛練する爲に之を必要と思はれたとであらう。

斯く耶蘇の旅の目的は休息し敎育する爲てあつたのて或る家に入つて人に知られぬやうにして居つた。然れども風采の特異な人が十人餘りも弟子を連れて來て居ると云ふ噂が立てば、何人てあらう、いや彼はガリラヤて大變な奇跡を行ふた人てあるさうだと云ふやうに、口から口に傳つたに違ひない。さうすると一人の婦人、此の人の幼き女は精神病に罹つて非常に心配して居る人てあるが、耶蘇の休んて居らるる家に入り來り彼れの足下に平伏して女の病を癒して下さいと歎願した。馬太傳には「其の地に住めるカナンの婦出てて呼はり曰ひけるは

主よダビデの裔よ我を憫みたまへ我が女鬼に憑れていたく苦めり」と書いてある。馬可て見ると耶蘇の居らるる家へ婦が入り來つたやうてあるし。馬太て見ると耶蘇が通つて行く處を婦が頻りに呼び留んとして叫んだ樣子である。一體馬太は馬可から取つた節もあるが、此の處は出處が別てあるらしい。兩者矛盾するとまて行かぬが馬可の方が時の事情や耶蘇の態度などを比較的良く了解して居るかと思はる。

猶ほ此處て明にして置くべき事はこの婦の國籍であるが、馬可傳には「此の婦はギリシャ人にて其の國籍（或は人種）はサイロビニケのものなり」と記してある（日本譯はあまり精確でない）。馬太傳にはカナンの婦としてある。蓋しギリシャの風俗のうちに生長してギリシャ語を用ひて居るが、其の人種から云ふとサイロビニケのもの卽ちカルタゴの方のフキニシャ人てない、スリヤの方のフキニシャ人てある。遠く其の原を質して見ると舊約書にあるカナン人の後裔てある。要す

るに純然たる異邦人であつてアブラハムの子孫ではない。

然るに耶蘇在世中の使命はイスラエルの迷へる羊を救ふ一面に限局せられて居た。これ神の命である。然し耶蘇は角立てて斯かる事を論ずるを好み給はぬ。謎のやうな歌のやうな警語を以て答へられた。殊に婦人には入り易い食卓の事から譬喩を取られた。「先づ兒女に飽かしむべし、兒女のパンを取つて犬に投ぐるは善からず」。この婦人は怜悧でしかも質直であつた。少しも苦々しい氣持を起さず、何處までも積極的である。耶蘇の心有りてか無かりしか殘せし一角の活路につけ入つて「主よ然りされども犬も案の下に在りて兒女の遺屑を食ふなり」と云つた。大出來である。

耶蘇は非常に滿足し且つ喜ばれた。何を喜ばれたか。先づ異邦の市の邊り。思ひかけぬ處て信仰の花を見出した喜びてある。次には此の婦が耶蘇の其の前に横へた障害物を乘り越えて進んだ氣立てある。其の善良な品性てある。然し

て信仰と云ふ麵酵(ぱんだね)がはいると其の魂が活きて來て才智さへも喚び起されて面白い事が云へるやうになるのてある。彼女の信仰は固より芥種の一粒の如く小なものてあるが活ける信仰てあつた。

キイブルの歌に曰く

いと物凄き空に光閃き
趣き無き野にも音樂あり
眺め平に青葉もなき處
雲雀は空高く揚り
ほがらかなる調べもて歌へり
世に疲れ淋しさを歎く心耻かし
此の空にかかる虹よりも美しく

十字架に近く道

晨の雲雀にまして快きは
聖き家庭に見出さるる
基督者の德の柔けき光なり
牧者の傷める心になつかしきは
かかる光に與るを思ふことなりけり

耶蘇はフキニシャから方向を轉じて東の方デカポリスに行かれた。路はレバノン山の一角を越え、レオント河上の岩橋を渡り山水の景色轉た奇絶なるものがある。デカポリスは「十の市」と云ふ意味である。ガリラヤ海の東一帶の土地の名であつてバレステナの一部分であるが、住む人はユダヤ、フキニシャとは人種を異にした希臘人である。歴山大王東征の頃希臘人をここに殖民した。セミ人種に圍まれた希臘人は十市の同盟を造つて自ら衛つた。紀元前六十二三年頃ポンペイ之を征して羅馬の權下に服せしめた時自治の權、貨幣鑄造の權を

許した。基督の時代には希臘の文明貿易正に盛を極めたもので、ガリラヤ對岸の山や岡の上には希臘式の建築の美麗な神の宮が建つて居た。今日十市のうちたるゲラサ、フキラデルフキヤ、ガダラの跡を訪ふものは此等の宮や劇場浴場の頽跡を觀て坐に當年の希臘文明の名殘を懷ふのである。但し基督の時代と雖も全く希臘人のみではなく希臘人、スリヤ人、猶太人、羅馬人相混じて住んだ。耶蘇の弟子に取つては色々目新らしい事が多かつたと察せられる。

耶蘇が此の地方を横斷してガリラヤ湖邊に出たときに起つた一の話が聖書に傳へられて居る。

人々聾の訥る者を耶蘇に連れて來た。訥ると譯してあるが、普通の訥るとは違つて、舌に故障があつたと見える。且つ聾であれば良く話の出來る筈がない。聖書中の話の書家として名高いキットオと云ふ人は十二歳の時梯子から落ちて聾になつた。それから口を利かぬやうになつて、初めて話をしやうと試み出した

は二十歳の頃であつた。其の聲は粗くして良く判らなかつたと云ふ事である。此の人が耳が聽えなくなつた時の事を記して云ふには「自分に取つて全世界は啞となつた。人間の聲の音樂の我を感ぜしむるものなく、我が周圍にも上にも下にもたゞ寂寥なるのみ、永久不斷の寂寥なるのみであつた」と。盲も苦いてあらうが物質の外の千萬無量の消息を運んで來る人間の聲、自然の聲に觸るる由なき聾の身の上は憐むべき限りと云はねばならぬ。耶蘇は之を見て憐み之を癒したまふた。其の方法は「衆人を離れ之を外に携れ行き指を其の耳にさし入れ又唾して其の舌に捫り」と書いてある。初めて耳が開けた時耳に入るものは紛紛擾々たる聲でなくして耶蘇の聲のみの聞こゆる靜な處に連れて行かれたのである。然して耶蘇は言語の聞こえぬ人にも通ずるやうな所作を以て彼に語られた。然して後天を仰いで歎じたとある。歎聲は時々耶蘇の口から漏れた。馬可傳八〇十二にも心のうちに深く歎息せられたことが書いてある。彼は人の考の

誤れるを歎じた歎きであるが、此れは人の世の不幸惱の多きを傷まれた歎息である。ヘンリイ・ドラモンドや又デウキドソン教授の傳など讀むと、彼等の清き魂は世間の事に觸れて歎息を發した事が記されてある。歎息のなきものは歎ずべき事であると思ふ。

却說耶蘇はアラマイク語を以て「エッバタ」卽ち「啓けよ」と云ひしに、其の耳ひらけ舌の絡ゆるみて正しく言ふやうになつた。

『多くの跛者、瞽者、瘖者、殘缺者および各樣の疾病なる者を伴ひ來りイエスの足下に置きければ卽ち之は醫しぬ。是に於て瘖者はものいひ跛者は步み瞽者は見たる人々見て奇しみイスラエルの神を榮めたり。』

（二）新しき時代と舊き麪酵

耶蘇は猶も旅路を續けて今やダルマヌタと云ふ處に着せられた。ダルマヌタの跡は明には分らぬがガリラヤの南岸、今のデルヘミヤと云ふ村のあたりてあ

らうと云ふ學者が少くない。馬太傳には「マグダンの界に至れり」（日本譯にマグダラとあるはマグダンに改むべきである）とある。マグダンもダルマヌタも大抵同じ地方にあつたと見える。

この處でパリサイ人が耶蘇の處に來て天よりの徴（しるし）を見せよと求めた。たゞ願ふたに止まらず詰り初めたとある。彼等は印形が押してなければ如何なる書き物も信用せぬ樣な精神狀態になつて居る。紅海の水がこゝに分れるとか天から火が降るとか云ふことがなければ、此人が果して神から遣はされたものであるか當てにならぬと云ふやうな考である。耶蘇は復た心の中に深く嘆息し給ふた。何たる判斷力の鈍く想像力の狹いことであるか。「暮には夕紅によりて晴ならんと言ひ晨には朝紅また曇に由りて今日は雨ならんと云ふ僞善者よ空の景色を別つことを知りて時の休徴を別ち能はざるか。」靈界の空は徴（しるし）に充ちて居る。バプテスマのヨハネは晨の明星でないか。今や東天紅にして新時代の開けんとする徴は至る處に見るべきではないか。耶蘇は世の人の罪を悲み其の頑冥を歎るる

とともに、社會に對して失望するものでない。來るべき時代を望んで躍り立つやうな壯な氣象に充ちて居られた。

耶蘇はパリサイ人等を離れて再び舟に乘り向ふの岸をさして渡られた。向ふの岸とはこれからカイザリヤ・ピリピの旅に行かるる筈であるから湖水の北角であらう。卽ちベテサイタの方に舟を遣られたであらう。洋々たる水、蒼々たる山、何時見ても自然で又舒暢である。自然にはパリサイ的の處は無い。耶蘇の口から自然に次のやうな敎が語られた。

この時弟子の麵麭の用意をすることを忘れたものと見える。如何なる機會で之を忘れたのであるか。彼等の多くは元來漁夫であつて舟に乘ることは好である。舟に乘ると云へば氣も心も空になつて食物の用意をすることも忘れたのであるか或は又パリサイ人との應對から自由になつた嬉しさの餘りに麵麭の事を打忘れたのであるか。詳かでないが兎に角面白い。昔は國家の事を談じて居るうちに

飯の焦げるのも忘れた志士があつた。耶蘇はサマリヤの婦人に道を語つて居るうちに飢を忘れ給ふた。人の幸福は或る事に心を吸收せらるるに存する。何を食ひ何を着るべきかと云ふやうな事のみ始終念頭から離れぬやうては困る。我々は他に決して忘れてはならぬ大事がある。預言者エレミヤは叫んで云つた「處女はその飾物を忘れんや、新婦はその帶を忘れんやされども我が民の我を忘れし日は數へ難し」(二〇三/世三)。神を忘れるのは實に赦し難い忘却と云はねばならぬ。

世には忘れてはならぬ大事もあるか又是非忘れねばならぬ事もある。惡い學校で教育を受けた人は良い教育を受ける爲に惡い教育から得た多くのものを忘却し脱却せねばならぬ。其處で耶蘇は此の機會を利用して弟子を戒め「心して パリサイ人の麪酵(ぱんだね)とヘロデの麪酵を慎めよ」と云はれた。パリサイの麪酵とは何であるか。理想がないてないが、それが生活の全體を支配して居らぬ、其の宗教に中心の誠が働いて居らぬ、虚僞の分子がある。其の結果が僞善となり形

式的となるのである。ヘロデ一家の主義は何であるか、徹頭徹尾現世的であり物質的であつて何等の高尚な理想がない、向上心がない。今日で云へば成功一遍を目的とする徒である。此の二の流儀は黴菌の如く世間に充ち滿ちて居る。基督の弟子たるもの高潔、誠實、質朴の精神氣風を維持して世間の惡風に感染せぬことを心がけねばならぬ。蘇東坡の文章のうちに、人の病は大底治すことが出來るがたゞ俗なと云ふ病は治し難いと云ふことがある。耶蘇の云はれた如く心して慎べきことである。

耶蘇のこの度の旅行の目的の一は弟子を住み慣れて居つた處よりも一段廣い天地に導きて眼界を大にし考を廣くせしめてパリサイ人やヘロデ流の麪酵を拔くためにあらずや。然るに弟子はまだ此師の心も言も了解することが出來なかつた。麵麭を買ひ込むことを忘れたがため耶蘇が機嫌を損じて我々を叱りたまふかと思ひ違へて互に論じ合ふた。耶蘇は彼等の思想の幼稚なるを歎かれた。

自分は麵麭を忘れた位の事を兎や角云ふものでないことは解つて居さうなものである。「何ぞ互に麵麭を携へざりし事を論ずるやまだ悟らざるか汝等の心なほ鈍きか目あつて視ざるか耳ありて聽へざるかまだ覺らざるか」。隨分強い言である。彼は更に五千人に五の麵麭を與へたとき餘屑を幾筐擔ふたか又四千人の場合には如何であつたかと問れた。弟子は「十二なり」「七なり」と答へた。宛然小學生の敎場の答の樣である。弟子は筐の數だけは誤なく記憶して居る、然ども筐の數を憶て居るばかりが能事でない。記憶すべきは過ぎ來し方に被りし神の恩である。之を良く記憶して居るならば今日麵麭を忘た位の事は論ずるに足ぬ。回顧すれば我に賜ひたる恩は限なく豐である。齷齪として眼前の小い事を思ひ煩べき時でないでないか。過去に於て之よりも數層の難關を切り拔けさして、今に至らしめたる神の恩寵を思へば、今更ら何の意氣沮喪することやある。主耶蘇は誰であるか我等に何を爲しめんとし給ふか。我等の思想と志はこの大問題に

向ふべき筈である。耶蘇は終に重ねて「何も悟らざるか」と警戒せられた。

その中船はベテサイダに着いてここでは耶蘇が盲人の目を開かるる事があつた。旅の眺も又旅中の敎訓もいよ〳〵高い處に進み行くのである。

（三）大なる問題

耶蘇と其弟子は今やカイザリヤ・ピリピに着した。此處はガリラヤ湖を去りて北に行くこと三十哩、ヘルモンの山北に聳へヨルダンの主なる源流此處に發し、白楊、槲その外の常綠樹多く、西の方には沃野あり麥豐かに實る。時節は何時頃かと云へば逾越節の後の事であれば夏か或は秋であらうと思はれる。耶蘇は何事をなすにも背景を無視せられぬ。今や重大なる問題に就きて弟子等と靜に談話を交されやうと云ふ際、先づ崇高淸美な自然の景色の裡に弟子を伴はれたのである。耶蘇は道すがらも淸き思を胸に湧へられ、戰ひつゝ行かれた樣子がある。

耶蘇は弟子を教育する順序として先づ神の國を說かれた。彼等を向上せしむる理想、彼等の努力を献ずべき目的をば神の國の一語を以て表示せられた。「何を食し何を着んと思ひ煩ふなかれ、たゞ神の國と其の義しきを求めよ」。此の志を立てしめ此の理想を見出さしむるは教育の第一着歩である。然れども耶蘇の教育今や新しき時期に進む可き時が來た。たゞ美しい理想に向ふと云ふばかりでなく、人生の眞意に堀り入らねばならぬ、罪あり苦みあり死ある此の世に處して行く使命を覺悟せねばならぬ。之が爲には一層深く耶蘇の精神を學び其の深き意識に同情を献げねばならぬ。乃ち談話は耶蘇は誰かと云ふ問題より始つたのである。

耶蘇は問ひ、弟子は答へた。世間の人の耶蘇を觀る見識の淺墓さよ。或はバプテマスのヨハネが生れ更つたのであると云ひ、或は昔し天に登つたエリヤが復た此の世に歸つて來たと云ひ、或は又豫言者エレミヤのやうな人であると云ふ。

少しも一個の定見を抱き耶蘇の面目を捉へ精神を了解した人がない。之を話し合ふ話でさへも浮世話と一樣になり易い。其處で耶蘇は容を改めて「然らば汝等は我を言ひて誰となすか」と云ふ一問を發せられた。答を待つ間實に嚴肅な瞬間であつた。耶蘇の心臟は鼓動しつらん。この際勇を鼓して言ふべき事を言ひ得るはペテロを外にして誰あらんや。さすがに彼は飛躍し得る人であつた。斷然たる人であつた。答へて曰く「汝はキリストなり」と。富もなく位もなくガリラヤ人の評判も衰へ獨り弟子を伴ふて異鄕にさすらへる此の耶蘇こそは昔から豫言せられたメシヤであると告白するは容易ならぬ勇氣を要する業であつた。「主よ汝を去つて何處に行かんや永遠の生命の言を有するものは汝なり」と言はしめた實驗があつたからである。耶蘇は非常に滿足せられ、「ヨナの子シモン汝は福なり、そは血肉汝に示せるに非ず天に在す我が父なり」と稱讃せられた。ヨナの子シモンと云はれたがの面白い。ガリラヤの漁夫ヨナの悴のシモンそれ

が世界の歴史に記憶せらるるやうな信仰の告白をするやうになつた。これは人間業でなくして天來の啓示である、「最早ヨナの子シモンではない、教會の礎たるペテロである、天國の鑰を授けらるるものとなつた。精神生活に於て破格の立身をしたものである。

事こゝに至る、寸刻も足を停むべき秋でない、鐵は熱せるうちに擊たざるべからず。耶蘇は弟子を率い着々大なる秘密に進まるるのである。即ち遠からずエレサレムに上つて多くの苦みを受け且つ殺さるると云ふ事を話された。馬太傳にも馬可傳にも「彼等に示し始む」と書いてある。我等にも耶蘇が十字架の秘義を示し始めたまふ時があるのである。

ペテロは耶蘇をして之を避けしめんとした。耶蘇にして之を避けんか。彼は自ら殺すものである、今まで活きて來た精神的生命を捨つることになる。其處で耶蘇は憤然として一大痛棒をペテロの頭上に加へれた。「サタンよ我が後に退け汝は

神の情を思はず反て人の情を思ふ」 竣嚴にして一歩も假借せざる態度である。一時前には辱なき稱賛を受けたペテロが今や忽ち此の叱責を受けた。ペテロは氣慨あり勇氣ある好男子であるが、ともすれば困難を避けやうとする一の弱點がある。祭司長の庭で三度耶蘇を知らずと云ひ、又殉教を避けて羅馬を去らうとしたと云ふ物語と云ひ、いづれも此の弱點を示すものである。若し此の弱點が大きくなるならばペテロの生命は涸れてしまふ恐れがある。耶蘇はこの事を心配して手強き警告を加へられたものであらう。然して考が今一層根本的にあらねばならぬ。月並の考をせずに須らく神と云ふ根本から考へ直すべきことを教へられた。蓋しペテロは耶蘇がメシヤであると云ふことは之を信じ、之を告白したが何處がメシヤたる所であるか、耶蘇は如何なる意味に於てメシヤであるか深く考へなかつたと見える。耶蘇のメシヤたる所以は主として苦み死にて罪より人を救ふ所にある。ペテロには此の點が能く解つて居なかつた。

話は耶蘇の人格問題から彼の最後の運命に及び、更に進んで基督の弟子たるものの精神理想に說き入られた。此の精神理想は耶蘇の經驗と事實を離れて成り立ち得ざるものである。神の爲に自己を献じて新しき生命を得ると云ふのが基督者の生活の理想である。耶蘇は人を信ずることが厚い。人は安逸や快樂によりて誘なはるるばかりでなく、犧牲により困難により引き着けらるる所がある。眞に人を動かす招きは樂しい花園に眠ることでなく十字架を負ふて我に從へ、我とともに死ねよと云ふ聲であることを信じた。耶蘇は人を信じて常に高い動機に訴へ給ふた。

(四) 變貌

カイザリヤ・ピリピの事ありし後六日を經てヘルモン山上の變貌があつた。路加傳には八日の後とあるがこれは前後の日を加へて數へたと見れば矛盾することはない。福音書には幾日目と云ふことを書いた處は多くない。想ふに此の一週間は耶蘇に取つても又弟子に取つても忘るべからざる一週間であつたであらう。弟子等はいろ〳〵惑ひ悶え苦んだであらう。然れども「夜は夜もすがら泣き悲むとも朝には喜びうたはん」と詩篇(三十〇五)の作者が歌つた如く、煩悶の夜の後には光明の曉がある。信仰生活には往々此の波瀾があり浮沈がある。我等は悶えもなく慰藉もなき生活よりも寧ろ悶えあり且つ慰藉ある生活を感謝して取るべきであらうと思ふ。

此の數日は別けても祈の多かつた數日であつた。カイザリヤ・ピリピの問答も耶蘇が祈られた後であつたが、此の事も亦耶蘇と弟子と倶に祈つた後であつた。我等をして今一入祈ることを多からしめよ。實に彼等は祈らんが爲に此の高き山に登つたのである(路加九〇二十八)。伴ひ行かれたのはペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人であつた。他の弟子と此の三人との間に差別を立てられたのは偏頗と云ふ

譯てはない。耶蘇の弟子を愛する愛は誰に薄いと云ふことはないが、耶蘇の精神を了解する力の高低に應じて、之を待つ道も自から異ならざるを得ない。ペテロ、ヨハネ、ヤコブは此の時耶蘇に伴はれ又ゲッセマネの祈の時にも偕に在る光榮を與へられた。

一日のうち孰の時か神と偕になることの出來ない時があらうか。然れども東の空白み初めて殘星猶ほ空に在る明方ほど心の澄み渡る時はない。我は朝早く起きて此清き天地の姿に接する習慣のない人を憐れむ。まして高山の上耶蘇に隨ふて神に祈る。何等の神々しき經驗であるか。斯かる時斯かる崇高な出來事があるのは怪むべき事でない。アウガスチンの懺悔錄のうちに、彼が信仰の道に入り母を伴ふて故郷に歸らんとしてオスチャと云ふ港で船待ちして居る間に母は神の御許に召された。其の數日前二人庭園に臨める窓に倚つて心靜に語ひつつある時、話は見ぬ世界に於ける生命の美しさに及んで、二人の靈はだんだん

引き上げられ、日月星の光の出づる處よりも更に高き處に在るかと覺え恍惚として少時(しばし)靈の初穗を味ふたと云ふ經驗をしたことが記してある。遠き昔の事のみならずヂエームスの「宗教的經驗のさま〴〵」のうちにも忽然として靈的高潮に達した人の告白が幾つか記してあつたと憶ふ。人の深き惱みあるとき、或は世を去らんとする前神の恩によりて、夢のうちに幻のうちに靈界の初穗を味ひ其の光明を瞥見して力を得た例は少くない。尊い幻影ほど人を慰むるものはない。基督は今や實に此の慰を要する時機に臨んで居給ふた。十字架の彼方に光あることは十分認めて居られたけれども、其の事が希望であり知識であるばかりでなく、一層如實に觀得し接觸せられねばならなんだ。耶蘇の死の後に復活があつた。然れどもこの復活の前に幾度か復活があつたに違ひない。吾等にもしば〴〵此の復活の經驗がありたいものである。

耶蘇の爲に此の事が必要であつたばかりでなく弟子の爲にも必要であつた。

彼等は日夜耶蘇と寢食を偕にするの光榮を與へられて居たが、物に慣れる爲に反て感覺が鈍れて其の靈妙不思議なるに驚くことが出來なくなる恐れもある。謙遜な質素な單純な又貧しき耶蘇の外面に包まれて居る神の唯一子の榮を忘ることもあつたであらう。常に新に基督を見出ださねばならぬことは昔の弟子も今の我等も一樣である。之が爲には耶蘇が我等に向ふて居らるる方面ばかりでなく、彼が神に向ふて居給ふ方面、靈なる世界に對して居給ふ方面を仰ぎ觀なければならぬ。「汝が無花果樹の下に居るを我が見しと言へるに因りて汝信ずるか。之よりも大なる事を汝見るべし。我實に我等に告げん天開けて神の使等人の子の上に昇り降りするを見ん」と耶蘇が嘗てナタナエルに言はれたのは此の意味である。耶蘇が我等に何々の事をして下さるから信ずると云ふだけでは蓋しまだ宗教の眞味に達したと云へない。耶蘇が神に對して何をせられたか。神が耶蘇の爲に何を爲給ふたか、終に此處に溯らねばならぬ事と信ずる。

宗教には一種の靈氣に包まるる心持がなくてはならぬ。別なる天地に置かれた經驗あるを要する。たとへば戀愛のやうなものである。此の世界に別なる香が出來る、萬物新しい色を帶びて見らるる。弟子等は耶蘇から道德の訓誡を授けられ品性の理想を示されたばかりでは足りない。耶蘇の靈の往來する天地に伴はれて其の聖なる芳芬に包まれねばならぬ。是の如くして初めて遠からず出會はうとせる大波瀾に堪え得べきである。

モーセとエリアが現れたとあるが、實際此の二人が彼の世から此の世界に歸つて來たであらうか。困難な問題である。此れは全くの幻覺であつて、モーセ、エリアを夢に見た如く見たのであると云ふ人もある。しかし死者との交通が全くあり得ないと云はれない以上、又今日心象研究などの結果有り得ると信ずべき材料の少くない時に當りて、我等は寧ろモーセ、エリヤ其の人との交通があつたと信じたく思ふ。耶蘇の衣の白く光つたことなどもこの方面の事實によりて考

へ易くなるのである。

此事のあつた場處は昔から傳ふる如くヘルモン山上であつたであらう。今でもスリヤ地方の敎會では至る處八月六日に變貌の事を記念する禮拜を行ひ北レバノン山上海拔六千呎の香柏の森のなかで集會が開かるると云ふことである。

(五) 變貌の山下

山の上には榮光があり山の下には惱みがある。ペテロが三の廬を造つて何時までもここに住みたいと思ふたのは無理でない。然れども耶蘇の榮光はモーセエリヤと語る時に現るるよりも、山を下つて病み狂ふ小兒を救ふ心に却て良く現はれて居るではないか。山を下つて俗事に接するより生ずる危險ありとせば又之を避けて長く瞑想の堂に留りたいと云ふ心に一層の危險がある。

病める者が小兒であると云ふ一事一入哀れを深くさする。「耶蘇其の父に問ひ

けるは幾時頃より如此なりしや、父いひけるは少き時よりなり。惡鬼しばしば之を火の中或は水の中に投げ入れて殺さんとせり」。遺傳であるか其の外如何なる譯があるか分らぬが、無慘なるかな既に此の嫩木を折り曲げて居る。小兒は直接には其の兩親、遠くは其の祖先からどれほどの因果を承けて居るか。昨年米國ニウヨーク市で開かれた小兒の器具の展覽會が開かれた。其の入口に一の彫刻が飾られてあつた。倔强な夫婦のものが各々背に大きな重荷を縛れ相助けて辛うじて歩いて居る。一方には頽齡の老人が之も同じく重荷を負ふて其の重荷は他の二人の負へるものと繫り合ふて居る。然るに其の傍に一人の愛らしい小兒が立つて居る。それはまだ何をも負ふて居らぬが其の脊は既に重荷を負へる如く屈んで居る。彼も亦先天的の負擔の下に惱んで居るのである。つまり此の博覽會の目的はこの荷を輕め此の脊を正くする爲に開かれたと云ふ主義で此處に置かれたものである。

斯かる叫びの多い世界に於て之を救ふ勢力の薄弱なることが一段不幸を大ならしめる。之を山下に殘れる耶蘇の弟子に連れて行つたが之を療す力がなかつた。力の足らぬと云ふ事が我等の大なる歎きである。又耶蘇の深く歎せられた所であつた。曰く「あゝ信なき世なるかないつまで我れ汝等と共に在らんや何時まで我れ汝等を忍ばんや」と。耶蘇は此の世の狀態についていろ〳〵歎かれたが其の根底は無信仰にある。滔々たる世間に信仰が無いのみならず、彼の敎育しつつある弟子にさへ信仰がない。信仰は力の有無によりて驗せらるる。弟子等の力の乏しいことこれ卽ち彼等の信仰の乏しいことを暴露するものである。

耶蘇は易々とこの小兒を癒された。「手を執りて扶ければ彼れ起てり」とある耶蘇は手を出して其の者の手を執られた。愛情を以て溫かなる手、濃かなる情緒と憐れみを以てふるへる手を以て觸れ給ふた。この觸接から救ふ力が傳へられた。

弟子は其の後何故之を逐ひ出し得なかつたかと窃に耶蘇に問た。ここに弟子等の敎へ得べき處がある。何故力無きか。これ我等の提起するを要する問題である。耶蘇は祈ることの足りない所に其の原を歸せられた。（日本譯の聖書には「祈禱と斷食に非れば逐ひ出すこと能はざるなり」とあるが斷食の一語は改正英譯にも省いてある。馬太傳十七〇二十一の全節も同樣である）。

此の物語は盡きざる敎訓警告を我等に與ふ。特に我等の心を擊たるるは「我何時まで汝等と共に在らんや、何時まで我れ汝等を忍ばんや」の一語である。我等何時まで斯の如き力なき狀態にあるべき。耶蘇とともに深き憤を發すべきである。（一、十一）

永遠の序曲

日本人の頭腦の力は歐米人に比べて劣る所があるか。余輩は然か思はぬ。孰

れにも短かき所があり又長ずる所があると信ずる。併し物事を纏めて行く力少くとも思想を纏めて行く力に至つては我が國民に何處かまだ訓練の足らぬ所があるやうに思ふ。例へば日本の美術史、文學史、否な日本歴史でさへ西洋人の書いたものに割合に良く整頓したものあるではないか。日本の新聞紙は隨分進歩はしたが、まだ雷同する事が多く、心にも無い事を書くことが多く、各方面から立體的に觀察して公平な批判を下し眞相を明かにする事が少ない。此の點に於ては殘念ながら横濱あたりで出る外字新聞にも及ばぬやうである。此の原因は何處にあるであらうか。單純に斷定を下すとは出來ぬが、差し當り考に浮ぶ一事はこれである。日本人は農業にも漁業にも世界の孰の國民にも負けを取らぬ手際の良い所があり、器用な所があるさうである。それで或る點まで事が早く纏まる、小く纏まりが着き過ぎて却て本統の纏りが着かぬてなからうか。晴れの議場で堂々たる質問もあり演説があつたならば衆心を引き立てる事が出來る國

家の大問題でも事實は幹部とか首腦とか云ふ人の下相談で片附けて行くものだから事は早く運んでも天下の公論は更に振はぬ。早く實効を擧げたいと云ふ念が先になつて理義を以て爭ふと云ふことが少ない。面倒のない材料のみを用ひて容易く纏りを着けたいと云ふ傾きがすべての事に現れて居る。敎育に於ても學校に居るうちに一切の智識を與へて置かうとする。それ故に科目が複雜になつてしかも其の學問が將來大に發展する餘地を造る妨になる事が多い。

露西亞の或る文豪が大なる一篇の小說を作つて、此れは自分がこれから書かうと企てて居る本統の小說の序曲であると云つた。惜むべし其人早く死して唯序曲を書くに終つた。此處に言ひ難い森嚴な所がある。人生は畢竟序曲である。何う云ふ風に此の序曲を彈奏するかが問題である。匆しく解決を着けるのみが能事でない。ロオエルが「サア、ラウンファルの幻」の序曲に歌ふた如く奏樂者がそこはかとなく指を樂器の上に移し夢の世界から歌の近寄り來る橋を架け

る。指弦に觸れて望が生じ興が萠し縹渺として歌が漸く明け初める。此處に微妙言ひ難き天地が開ける。見よ世界歴史の幕が開ける始に於て東洋の宗教思想は幽玄神秘の序曲を奏でた。希伯來思想の如き調最も高きものであつた。地上の文化の續く限りは其の餘韻の絶ゆる時は無いであらう。宗教が現實世界の活動に貢献する一は、永遠世界より響き來る調を移して時代の先に堂々たる序曲を奏する所にあるでなからうか。時代思想との接觸契合の點を見出さんと力むるも亦益のない事でないが、餘り器用に纏めやうとする所から却て無理な纏め方になつて鼎の輕重を問はるるやうになる。他との交渉を詮議することの好な人は其の方に盡すも惡い事でないが、それよりも自ら持つて居るものを確と捉へ明に觀じ眞實に之を人に示すのが、時代思想の我等に求むる所であらうと思ふ。

或る人は言ふてあらう、宗教は詩でも音樂でもない、もつと現實なものであ

る人の靈魂の傷を癒し人の足を洗ふものであらねばならぬと。然り余は寧ろ云ひたい、宗教は詩の如き情調に鼓吹せられて僕の如く奉仕するものであると。ヨハネ傳第十三章耶蘇の弟子の足を洗ひ給ひた一段はどのやうに書き起されてあるか。曰く「逾越の節の前にイエス此の世を去りて父に歸るべき時至れるを知り世に在りし己の民を既に愛し終に至るまで之を愛せり」。又曰く「イエス己の手に父の萬物を賜ひしことと神より來り神に歸ることを知り云々」と。此處に限りなく美麗で端嚴で永遠の哀音を含める序曲があるではないか。永遠に對する思念、限りなき愛、明なる見解、又高き自覺がある。斯る心が錯綜して奏づる音樂に包まれて耶蘇は弟子の足を洗はれた。著者も此の一段の事を記し起すに當り容を改め心持を新にして筆を執つた態がある。

夢の如く短かき生を此の世に享けし我等は永遠の胎より出でゝ永遠の海に流れ行く。逝いて歸らざる水の流れ、蒼茫の空に明滅する星の光、大空を染むる

夕日の色、曉の空に響く鐘の音、いづれが永遠世界の音信を傳へ悠久の悲哀を彈ぜざるものぞ。まして晨夕を圖られず、死の波打つ磯邊を歩みつつ愛し愛せられ、愛の爲に苦み苦みて愛の永なる天地を慕ひ、不朽の痕跡を此世の濱邊に印せんとして居る。眞面目なる經營のうち、誠なる人情の發露のうち、必ず永遠の春景を豫想して居る。夕市井の巷に響く俗曲のうちにさへ時に惻々として永遠の哀を惹くものがある。然るに敎を說くもの人を導びきて此の岸頭に立たしむることを忘れ、空の色とともに移り行く時代の習氣に尾行し、雄渾、壯大神秘の序曲を奏して、明け行く東洋の新時代の格調を定むる能はざるは歷史が我等に望む所ではなからう。フランシスは「太陽の曲」を歌ひて癩病人の友となつた。我等は如何なる序曲に鼓吹せられて信仰生活を營んで居るのであるか。

（二、十）

義務と悲哀

耶蘇縛に就く夕其弟子と最後の晩餐を食せんとし、準備の爲に遣さんとせる二人の弟子に、斯く〳〵の家に往きて斯く〳〵言へ「然らば調へ備へたる大なる二階坐敷を見すべし、其處に我らのために設備せよ」と云へり（マコ傳十四〇十五改譯マコ傳を借用す）耶蘇は既に大體の事を調へ備へて遣算あることなし。準備の爲に遣さるゝ弟子等の爲すべき事は準備せられたる上の準備を足すばかりなり。昔はアブラハムの子イサクを犧牲として神に献げんとせし時、其の身代とすべき牡綿羊を見出し其處をエホバ、エレ（エホバ預備たまはん）と名けたりと創世記に記しあり神の計畫既に成り準備遺憾なく調へり、我の爲す事業は、調へ備へたる二階座敷に備を爲すに同じ、耶蘇は神の御業に倣ひ人知らぬ内に萬事萬端の準備をなすを喜び給へり。五千人に麵麭を食せしめしとき、ヨハネ傳に記す所によれば「イ

てエス目を擧げ多の人の來れるを見てピリポに曰ひけるは何處よりパンを市て彼等に食しむべきか」とあり。ゴデエは此の言に幾分誂謔の氣味ありと云へり。或は然らん。却說耶蘇は準備せられたる彼の家に到り晩餐の席に着きしが、弟子の足を洗ひしに始まりて、イスカリオテのユダの本心に最後の訴へを試み、終に効なきを見て其の席を去らしめたる後、弟子とゝもに晩餐を食し、懇なる訓誡を與へ、祈を爲して心に期し居りし所、弟子の爲に爲すべき所は遺憾なく之を果しぬ。この間彼は憂ひ悲みの色を表されし跡なく、快く樂く勇ましく行き屆く親切を以て弟子の爲に心を用ひ給ひしなり。人の爲に勞する喜に驅られて己が身を壓し來る大苦難を忘れしが如し。

人生の路嶮しく雪荷多し。妻子を養ふが爲に日毎の辛き勤勞を執る職工も、深夜病者の寢床を守る看護婦も、ペンを執つて孤獨なる戰をたゝかふ文士も、此の健氣なる愛の喜に鼓吹せられざるべからず。

然れども奮鬪的生活の福音の終る處は宗教的生活の漸く本論に入る所なり。耶蘇は既に心殘なく當面の責任を果たして後、晩餐を食せし家を出で、歩をゲツセマネの園に運びぬ。深憂身に在るを忘れし如くなりし耶蘇は是に至りて忽ち悲哀の大波に捲き込まれんばかりとなりぬ。血の汗を流して祈り給ひぬ。

明日旅立せんとする人日一日奔走して果たすべき用務を果たし、燈下認むべき手紙を認め終りしその時、其の心に言ひ難き平和あり、喜びあり、又悲みあり。人事を爲し終へたる時は卽ち神の御聲を聞く時なり。此の新しき章を有するこそ神を知るものの特權なるなれ。我等今一層日々の義務を安全に成し終り段落を明にして進むならば、神に接する機會今一層多からん。昔ヤコブの身にありしベテルもペニエルも我等の經驗に明なるべきに。

耶蘇は泣いて祈りつゝあり。弟子は眠りつゝあり。彼等心に憂ひなきか。否路加傳には「彼等が憂て寢たるを見」とあり。耶蘇の悲は醒めたる悲なり。弟

子の悲は眠れる悲なり。さながら曇りたる空に頭を壓せらるる如く氣分晴れず、心引き立たぬ狀態にありしならん。耶蘇は彼等に云へり「汝等の中我に何處へ往くとたづぬる者なく反て我この事を言ひしに因りて憂なんぢらの心に盈てり」と(ヨハネ傳十六〇六)。彼等は問ふべき事を問ふ能はず、爲すべき事を爲さず、たゞ茫然として思ひ惱めり、故に耶蘇の如く醒めて悲むこと能はず、憂ひて寢たり。思へ、我等の狀態も亦弟子共に似たるものなからずや。問ふべき事ありて之を質して徹底せしめんとせず、果たすべき眼前の義務ありて爲さず、弟子共が師の足を洗ふべくして洗ざりしに似たり。

神の前に泣いて訴へ得る人は福なり。人の爲に爲すべき事否爲し得る事を充分に盡したる人にして初めて神の前にて泣くを得べし。我等の患は神の前に泣き得ざるにあり。

夫れ耶蘇は何の爲に泣きたりしぞ。此處に仔細に說明すると能はざれども、

少くとも二の理由ありしことと察せらる。「斯ほどまでもせざるべからざるか」と云ふ心其の一ならずや。空の鳥は巢あり野の狐は穴あり、然るに彼は枕する所なく、罪なき身を以て罪ある人の爲に苦みぬ。然るに此の上猶十字架に懸りて死ぬるほど苦き杯を飲まずして已む能はざるかと。犧牲に或る制限を附せんとするは人の情なり、限なき愛を以て限なき犧牲を甘ず、これ神の御心なり。

「實に斯くまでせざれば救はれぬほど人の罪に沈みしか、淺ましき姿に成り果てしか」と云ふ事も此の夕耶蘇の腸より發したる叫なりしならん。

此の如く歎き叫ぶ人なくんば人類は救はれず。此の如き衷心の悲哀を懷きて義務以上の事(義務に限あらざれども)を爲す人あるが故に余は信ず罪人は救はれ教會は振起す。

是に於て我等は耶蘇の麭麪をさき葡萄酒の杯を頒ちて立てたまへる聖き晩餐の禮典に復らん。深き情に充つる時には其の發する言も單純なり、途切れ〳〵

なり。怒りたる時、悲ある時、惱める時皆然り。然れども心の冷き時に整へ磨きて出だす言よりも人の腸に徹する力あり。耶蘇の晩餐の型も又其の時の言も至て簡單なり。然れども簡單ならざるを得ざるほど充ち溢るる心情より出でたることを記憶せざるべからず。此の單純なる表章を複雜なる又熱烈なる原形に還元して味はざるべからず。

卽ち我等をして耶蘇の如く爲すべき義務を丁寧に懇切に果たさしめよ。耶蘇の如く己の勞苦を忘れて人を幸にし善くすることを喜びとなさしめよ。然して耶蘇の如く神に泣き得るものとならしめよ。斯くまで耶蘇を悲ませたる己の罪の爲に又人の罪の爲に泣く心あらしめよ。然して後神より出づる慰によりて人生の重荷を負ふて戰ふを得せしめよ。

實に主耶蘇は我が心の心血の血なり。其の言其の經驗斯の如く靈魂の底に徹する人何處に求めん。此の如き救主を降し給ひし神の恩謝(おんしゃ)すべきかな。(四十四、十)

常に在らざる基督

ひさかたの天は　まきさられ
あらがねのつちは　くづるとも
とこよにわたりて　たかしらす
エスきみぞひとり　かはりなき

我等の信ずる基督は永遠の基督なり、昨日も今日までも變らざる基督なり、彼は世の末まで汝等と偕に在りと約束したまひぬ。吾等は斯く如き主を有てることを感謝す。

然れども余は又「貧しき者は常に汝等を偕に在れど吾は常に汝等と偕に在ず」と耶蘇の云はれし言に限無き味を感ず。此は固より耶蘇が何時までも此の地上にあらざるを言へるものなれども擴(おしひろ)めて更に大なる敎訓に接することを得べし。

耶蘇が肉體を以て弟子と偕に在る日は長からず。天の彼方に彼を仰ぐべき時來らん、各自の心に宿る靈によりて彼の聲を聽くべき時來らん。基督は常に同じ方に在さず。將軍は戰の最も激しく最も苦しき方面に心を用ひ、或は親しく臨んで軍隊を指揮す。人生の戰は常に同じ地點に戰はれず、休息あり凱旋あり此處に始まりて彼處に始まる。之によりて人は堪へ得べし。耶蘇がナザレに於て勤勞して日毎の麵包を得母と弟妹を養ひし時の戰と、ヨハネより洗禮を受け之より神の道を世に傳へんとして起ちたまひし時の戰とは同じからず。戰場既に異なれば將軍の在す處も異ならざるべからず。人窮すれば則ち本に反る。戰苦しき時神を呼ぶ。戰終りて休息を得れば基督を忘れ易し。焉ぞ知らんこれ則ち新しき戰他の方面に開かれ、驕慢と戰ひ、利己心と戰ひ、種々微妙たる誘惑と戰ふべき時なるを。異りたる方角に基督の號令を聽くべき時なるを基督は常に同じ處に在ますず。今日我が立てる地位に立ちて基督の聲を聽くと云ふことは我に再びあらざるべく、他人にも同じ事あるべしと思はれず。是に於て我等は心を鎭め耳を敏くして主の命令を聽き徹底するまで其の教訓を受けたる後、更に新しき方面の戰に向ふ心懸けなかるべからず。

耶蘇は罪ある人の友と呼ばれたりき。罪を憎むこと少なきにあらず罪を憎むこと深刻なるが故に人を罪より救ふことに熱心なりしなり。我等が人の罪を嘆き己の罪を憎む苦み悶へより遠ざかるとき我基督我より遠ざかる。常に罪に負けつつある心に基督は在ますず。基督は敵軍と咫尺相接せる戰線には立ち給ふと雖も、敵軍の中には身を置き給はず。

國家社會亦然り。幾度か基督は近きて我が祖國、我が同胞を救はんとす。神を信じ之に祈る少數者のある間、道德の腐敗を嘆する良心の存する間、理想主義の哲學を愛する憧憬の存する間、奢侈を憎み質素の生活を慕ふ心の亡びざる間、清潔なる家庭のある間、基督耶蘇は幾度か來りて此の國の戸を叩き靈的復

興を喚ぶならん。しかも其の機會は常に在らず。

日は東より出でて西に入る。雲之を扼するにあらずば三百六十五日の間常に然り。然れども或る日或る處に於て一度之を見ずんば復た容易に見る可からず此時之を寫さずんば復と其機會あり難き色彩あり光景あり。詩人能く之を捉へ畫家能く之を描くを得るなり。まして活ける神、活ける基督に於てをや、彼は永久に新鮮なり、彼には常に新しき現在あり、彼によりて示さるる神の意志常に靈活なり。彼がペタニヤ村に到り愛する男女より饗應を受けしとき、大難と別離眼前に逼れり。決心堅く、情緒深く、平生とは異る樣おのづから表れたりしならん。一座の人之に心づかざりしも獨りペタニヤのマリアのみは直覺的に之を悟りたり。只ならぬ心は反響して只ならぬ心の反動を起しぬ兼て貯へたる價いと高き香油を携へて耶蘇の足に塗れり。彼女の心には過去なく未來なくたゞ己の前に立てる大なる現在なる耶蘇あるのみ、其耶蘇の前に全幅の愛を捧ぐるあるのみ、

マリアは慧き婦人なり、無くて叶ふまじき一の物を忘れざる人なり。然れども彼女の爲せしことは冷きユダには愚なる事の如く見えたり。曰く「此の香膏を何ぞ銀三百に售りて貧者に施さざるや」。マリアもユダも共に慧き人なり。然れどもマリアは靈的の事實に敏きが爲に利害の念に於て愚なるものとなれり。ユダは利害の念に敏く打算に急にして靈的の感覺に於て鈍なるものとなれり。パウロはコリント人を諷刺して曰く「我等はキリストの爲に愚なるものとなり汝等はキリストに在りて智き者となれり」（コリント前四〇十）。我等をして智きコリント人とならずしてキリストの爲に愚なるものとなれるパウロたらしめよ。エホバを知るは知慧の本なり、基督の敎は人を賢からしむ。然れども基督より與へられたる知慧をば己の一身一家の利害を謀るに用ふることなく基督の御心を覺り善き業を成すために用ひしめよ。基督者の交をして利害の念によらず、共に神の國の爲に結ばるゝ愛たらしめよ。基督より與へられたるものを基督の御用の

ために献ぜしめよ。

「貧しき者は汝等と偕に在れど我は常に汝等とに在らず」。貧しき者は常に在るが故に之を顧るを要せずと云はず。耶蘇は貧しき中より猶ほ貧しき者に施すを怠らざりしと見ゆ(ヨハネ傳十三〇二九)。基督の敎會が貧者の存在を忘るゝ時は則ち墮落す。貧しき者の葬式にも富める者と同じく香しき花の香を以て薫せしめよ。これ實に基督に香油をさゝぐる道なり。然れども常にあらざる基督に對する心を以て常に在る貧者を懷はしめよ。耶蘇の十字架と復活は一度ありて復た常にあらず。然れども歴史上に於て極めて非常の事に屬するその出來事が。我等の日常の生活に於て日常接する人に對する道德を全く一變せしめたり。貧しき者を口實として基督に對する忠誠を減ずることなかれ、基督を口實として貧しき者に對する使命を忘るるなかれ。良く平生の道を履み行ふによりて常ならざる場合に處して驚くことなかれ。(二、十)

不安に勝たしむる事實

人はさまゞの不安に襲はるる。耶蘇が捕へれて十字架にかゝり給ふ前夜十二人の弟子とともに最後の晩餐を食せられた。其の席上「我とともに食する汝等のうち一人我れを交付すべし」と云はるゝや、弟子どもは心配して「我なるか」と口々に問ふたことが聖書に記されて居る(馬可十四〇十九)。鳥渡考へると、自分がそのやうな惡事をするものでないとは銘々の覺悟に存することであつて、それを他人に問ふと云ふは如何にも不思議の事のやうに想はるゝが、人情の機微此半ば無心の言に現れて居るでないか。獨逸の詩人の言のうちに、人の爲た惡い事を聞くときに此の惡事だけは自身は斷じて犯す氣遣はないと考へ得るものはないと云ふことがあると聞く。多少誇張の氣味はあるが、誰でも覺えのある心持を喝破したものである。高い塔の上に立つて下を見下して居ると、こゝから

飛び降りやうと云ふ氣になりはしないかと思ふ如く、弟子たちも、萬一そのやうな大罪を犯すやうな心になりはせぬかと自分ながら心配したてあらう。信仰弱き彼等は十分己れを信ずることが出來なかつたのである。

これは自ら意識した不安であるが、本人は大丈夫と思ふて居ても、心ある人から見れば炭々として危いかなと思はしむることもある。ペテロが耶蘇に向ふて「たとひ皆躓くとも我は然らず」と力昧だとき「今日この夜鷄二度鳴くまへに汝三度我を知らずと云はん」と云はれた(馬可十四、三十)。ペテロは耶蘇から見れば至て危き狀態にありながらそれを悟らずに居つた。これは自ら意識せざる不安と云ふべきである。

抑も弟子等は長く是の如き不安の有樣から脫することが出來なかつたか。否々彼等は、立つべき處に確く立ちて自らもてる力を信ずることが出來るやうになつた。『金銀は我に無し、ただ我に有るものを汝に與ふ』と云ひ得るものとなつた。不安に勝ち得たこの力をば何處から得來つたてあるか。

* * * *

極めて手近い處から考を起して見やう。世間の人を大づかみに分けて見れば、苦める人と苦まざる人との二種類にすることが出來る。ところがこの二種の人ともに不安の念に襲るゝ。苦める人は、この未だどれほど苦い目に逢ふことかと心細く思ふ。苦んで居らぬ人（全く苦みのないと云ふ人はないが）は何時この幸福を失ふかも知れぬ、運命の神は人の幸運を妬むといふやうな鬼胎を抱き易い。この故に黑雲の下にも怖れある如く、一點の曇りなく晴れ渡りたる天も亦空恐ろしく感ぜらるゝ。我が國の昔にも、希臘羅馬にも、このやうな心の現れた話は少くない。實際基督教ほどこの不安を取り去る勢力となつたものはない。その秘密は何處にあるか。

基督の與へた神の觀念、神は人を愛し護り其の幸福を欲する天の父であると

云ふ信念が基礎となつて居ることは無論であるが、この觀念を血となし肉となして深く人の實生活に入れたものは十字架と復活の事實とに存すると信ずる。

英國の宗教詩人キイブルのイイストルの夕の歌の初の二行は、余は置りては印象永く失せざるものである。

終に最と惡しき事は過ぎて
君は暗き床に深く置かれ給ひぬ。

人事は惡より惡に果てしなく落く行くものにあらで「最と惡しき事は過ぎぬ」

At length the worst is over と云ひ得る時あるぞ感謝すべき限なる。罪惡の濁浪は耶蘇の十字架の邊りに最も猛く高く逆捲いた。世の中に罪なき神の人を十字架にかけて殺すほど大なる罪があるであらうか。然れども見よ十字架の後に復活があつた。大なる犧牲は大なる勝利の榮光を以て報いられた。この世界は何處何處までも、慈愛の神の支配し給ふ世界である。神は我等を耐へ難き試練

に逢はせ給はず。これ苦める人に力を與へる信仰である。

苦み少く幸福を受けて居る人又明日の事を思ひ煩ふ必要はない。何とならば、この世に於て何事を失ふても、神の愛のうちにあるものは決して失はぬ物を與へられて居る。如何なる物を失ふともこれが却て神の愛、基督の愛を味ひ之を體得するの機會とならば、我等は世に於て得る所ありて損する所はない。十字架上の耶蘇は世の富も名譽も肉體の生命をさへ失ふた。然れども神の御心を成し神を愛し神に愛せらるゝの喜に於て更に大なる賜を受けた。此處に晴天の恐怖を取り去る勢力の源がある。

*　*　*

然れども最も大なる不安は罪の與ふる不安である。最も怖べき恐怖は罪より生ずる恐怖である。詩篇の作者は歌ふて曰く「我安けかりし時謂く永久に動さるゝことなからんと。エホバよ汝惠をもて我が山を堅く立せ給ひき、然はあれ

ど汝面を隠し給ひたればおぢ惑ひたり」（詩篇三十〇六七）。人生根本の不安は、罪の雲神の御顔を隔てゝ仰ぎ視ることの難きに存ずる。すべての人そを意識して居る譯ではないが、結局不安の病源は此に存ずる。

十字架と復活を信ずる信念は如何にして罪から生ずる不安より人を救ふことが出來るか。この大問題を、餘す數行の文字を以て解くことは望むべからざることであるが、約めて云へば、我れ基督に居り、基督我に居ると云ふ信仰に存する。

我等神の愛子基督の中に居るが故に、我等之を價せずと雖も神が其の子を愛する愛に浴することが出來る。罪に勝ち死に勝ちし基督我が中にあるによつて弱き我等も罪に勝つ力を與へらるる。

此に於て「我なるか」と云ふ問を發する必要なく、パウロと共に「基督の愛より我等を離せんものは誰ぞや」「我等をして耶蘇に由りて勝を得しむる神に謝す」と凱歌を奏することが出來る。

新約の血の背景

「これ汝等の爲に流す我が血にして立つる所の新約なり」、我等は聖餐式に列る度に此の語を聽く。其の言日月の光の如く炳としておのづから我等の心に映照する力あり。然れども其の意味を精細に考ふるに當りては其の背景を爲せる歴史的由緒に遡る必要あり。此の章に於ては聊かこの背景を明にせんとす。

先づ耶蘇は實際如何に言はれしか其の原形を調査する必要あり。此の語は共觀福音書と哥林多前書と都合四個處に記載せらる。其の中馬太と馬可は一群をなし哥林多前書と路加は又一群をなす。見易き爲め左に之を對照す。

（甲）(1)馬可十四〇二十四—『此れ契約（日本譯新約聖書には新約とあれども正しき寫本には新の字なし）の我が血にして衆の人の爲に流す所なり。』

(2)馬太二十六〇二十八—馬太と同文＋「罪を赦さんとて」

乙(3)哥林多前十一〇二十五—「此の杯は我が血に於ける新約なり」

(4)路加二十二〇十九、二十—哥林多前書と同文＋「汝等の爲に流す所のものなり」

「罪を赦さんとて」の一句は馬太のみに在り。又新約の「新」の字は馬太馬可にはこれなし。故に此等は姑く後節に讓り、四ともに共通に存する語を求むれば「契約の血」もしくば「血に於ける契約」なり。少くとも此の語は耶蘇の言はれしものと考ふるも誤らざるべし。是に於て先づ契約と血との關係より研究を起すを以て順序とすべし。血と契約とは如何なる關係なるか、これ最も單純なる問題なり。耶蘇の血が如何にして契約の血たるかと云ふことは然る後移るべき問題なり。血と契約の關係を知らんと欲せば舊約聖書に溯るを要す。舊約聖書中に出處として見るべき事實二つあり。一はシナイ山に於てモーセがエホバ

の言及び典例を民に授けしとき血を灌ぎし事實にして、一は埃及に於てモーセが小羊の血を門口の柱に塗らしめし事、踰越節の起原となれる事實なり。先づ前のものより始めんに事は出埃及記第二十四章に記さる。卽ちモーセ牛を殺して其の血の半を壇の上に灌ぎし後、契約の書を民に讀み聞かせ、殘る血の半を民に灑ぎて「是れ卽ちエホバが此の諸の言につきて汝と結び給ひし契約の血なり」と云ひしとあり。耶蘇が「これ契約の我が血にして」と云ひ給ひしとき遠き昔しモーセがシナイ山にて執り行ひし事と言とに引き當てられしことは疑を容るべからず、それにしても原來契約に血を用ひし其の昔の意味如何。血は契約をかたむる意味なることは明なり。支那にても血を啜つて盟ふと云ふ風あり き。これは一の血に與ると云ふ意味もあるべきが、それは別として血は契約をかたむるに止るや。又其れ以上の意味あるや。ヴエントの如き學者は堅むる意味に止ると解すれども、バイシユラグの如きはヴエントの說を以て總て聖書的

の見解と聖書の神學に反すと批評せり。「基督と福音の辭典」の中契約（カヴェナント）と云へる項を書きしゲルハアド、フオスと云ふ人もヴエントの說を評して肯定に於てば誤らざれど否定に於て誤れりと云へり。デヴキドソン博士も血を灌ぐことは契約を取り結ぶ時の風なれども、此の事が大體エホバに捧ぐる祭となりし上は、エホバとの新しき關係に入らしむる際人民の爲に贖をなし彼等を潔むるものなりきと云へり。見るべし有力なる學者の意見によれば血は誓約を堅むる以上の意味あることを。是に於て我等は更に進んで如何にして血が堅めるより以上の意味なるかを質すに當り、血の他の由緒なる踰越の小羊を殺す事に照さざるべからず。

耶蘇の最後の晩餐は木曜日の夜にてありしことは明白なるが、之が果して踰越の小羊を殺すべき日卽ちニサンの月の十四日なりしや將た其の前日卽ち十三日なりしや否や、共觀福音書と第四福音書と一致せざる點なり。共觀福音書は

最後の晩餐は除酵節の日卽ち踰越の羊を殺すべき日に行はれ（馬可十四〇十二）しとせるに反して。ヨハネ傳にては其の前日卽ちニサン十三日にありし順となる。孰れを正しとすべきか。余はバイス（ベルナルド）、バイシユラグ、サンデーウエストコツト、リイス諸家の說に遵ひてヨハネ傳を以て正しとせん。果して然らば晩餐式の日は踰越の羊を殺す日にはあらざるが、それにしても踰越の含意はありしや否や。これ自から別問題なり。

耶蘇の麪包をさき杯を分たれし事の中にはモーセのシナイ山に於ける契約卽ち出埃及記二十四章に載せられたる歷史的事實に因みたる意味あることは旣に記したる所なるが、之に併せて踰越の意味をも含みしや縱（よ）し日は踰越の小羊を殺して之を食するに定まりたる日の前日なりしとするも、其の意を含みたるものなるや、これ研究しつゝある問題なり。バイシユラグの如きは踰越と契約と二重の含意ありて麪包をさきしは踰越に因み、杯を分ちし事は契約に因みたり

と說明す。然れども又之に反對するスピッタの如き學者あり。其の主なる論據として、福音書の記事に小羊の事なきこと、踰越の晩餐に於ては陪宴者は各自杯を持てるに耶蘇の晩餐は一の杯を一同に廻したりと見ゆること、耶蘇の言には踰越に因みし節なきことなどを擧ぐ。然れども馬可傳には明に之を踰越の食と記しあり（十四〇十二—十六）て馬可より取りし馬太傳にも同樣に記されあり。スピッタの如き人は此等の數節は後人の挿入したるものなりと云ふ。然れども此の說には根據なし。兎に角馬可が耶蘇は踰越の意味にて晩餐を食せられしと認しことは明白にして、必ず據り處あるべし。ヘースチングスの「基督及び福音の辭典」にラムブレルトと云へる人の筆に成る「踰越と主の晩餐との關係」と題する一項ありて簡明に此の事を說明しあり。然して契約の思想と踰越の思想と兩意を併取することはあるべからずと云ふ議論を駁して、踰越の話はシナイ山に於ける契約を豫想したるものにして、後者は前者によつて初めて歷史

的解釋を得るものなりと主張す。

ラムブレルトより此の一點に就きて今少し詳細なる說明を聞くことを得たらば幸なるべきも、結論のみを擧げて論據を示さざるは遺憾なり。抑も踰越の祭なるものは何に淵源せるか異說紛々たる事なるが、除酵節（たねいれぬぱんのいはひ）なる穀物の初穗の祭と相合せしは偶然に起りし事にして、多分カナンに入りし後の事なるべしと云ふ。然らば初穗を獻ぐる農作の祭と云ふ意味は最初よりありしにあらず、他に其の由來を求めざるべからず。凡そ斯かる禮典や祭禮は、或る人物によりて意味あるものとなさるゝ前より其根となる風俗は存在せること多し。割禮はアブラハムの授けしものとするも、割禮其のものはイスラエル民族のみならず、近傍の民族にも行はれたる風俗なりしと同樣なり。アラビヤ人の間などに疫病の時に血を門口に塗る風あり、又かゝる時に駱駝の首に血を塗り、或は又進軍する時に天幕に血を塗る風もありたり。これは神と關係密なる家なることを示して疫

病を攘ふ意なり。踰越は之に淵源せりと云ふ學者あり。或は又結婚したる新郎が新婦を迎ふる時戸の閾に血を塗る風習ありしより來れるものにして、エホバの神を家に迎ふる意なりと解する人あり。兎に角血を塗ると云ふことが踰越の行事に於て重要なる事にして其れには神との契約と云ふことを象徴することは明なり。後世に至り種々なる意味加はり來りて、其の意味も頗る變遷し、埃及より救ひ出されし事を記念する意味重くなり來れり。囚虜時代に於ては自然に然らざるを得ざりき。斯くて個人的家族的の方よりも國民的の事主となり來りしが、それにしても救ひ出さるゝと云ふ意味は一貫して此の祭に伴へり。

耶蘇の或る家の樓上にて執り行はれし晩餐には、此の遠き昔よりの風俗と歴史其の背景を爲せり。然して踰越節の原の意味に尋ぬるも、又シナイ山に於ける契約の故事に質すも、血の契約と云ふ意味あるとは一樣なり。然して新約の「新」の一字は或は耶蘇の言ひ給ひしに非ず、後に附加せられしものとしても、

誤れるものに非ず。「新約」と云ふ語はエレミヤ書三十一章三十一節以下に見ゆる所にして、神の律法心の内のものとなり、人々神を識つて其の罪を赦さるゝことを新しと云へり。「罪を赦さんとて」との一句は馬太の加へたる解釋なりしとするも誤りたる解釋に非りしを知る。

如何にして血が罪の赦し又救に價値あるか。こゝは基督教の贖罪論に關係ある問題なるが、實際舊約書の中にも種々の思想相雜れり。有名なる利未記第十七章十一節には「血は其の中に生命あれば贖罪を爲すものなり」とあり。これには刑罰に代る意味はなし。然れども申命記二十一章一節乃至九節に載せられたる風俗を見れば、血を以て刑罰の代りとなす思想もありたり。此は又別の研究題目なり。此の一文の目的は贖罪論につきて或る思想を提供するにあらずして、晩餐の席上の耶蘇の言の由來する所を明にすれば足れり。

戰ふて歸らん

人生歸心多し。日暮れて人家路に急ぎ、年盡きんとして旅に在るものは家山を戀ふ。クリスマスの夕歌ふ幼兒の聲を聞けば、昔の我れ今の我れを懷ふて千萬無量の感を催さざる人あるべきや。歸ると云ふ語これ一の詩なり音樂なり。歸り得る家ある者、歸り得る舊友あるもの、歸り得る思想あるものは皆幸福なり。まして人の心は鹿の溪川の水を慕ふが如く活ける神の許に歸らんとす。

然れども人は戰はずして歸ること能はず。能く戰ふものにして初めて能く歸るを得べし、これ事の一面なり、能く歸るものにして又能く鬪ふを得べし。此れ他の一面なり。戰はんが爲に歸り、歸らんが爲に戰ふ、人生の皷吹力此の間に

存す。先づ戰かはんが爲に歸る一面を語らしめよ。

大なる革新は屢大なる復歸なり。ルウテルによりて開始せられカルヴインによりて訓練せられたるプロテスタントの宗教改革は思想上に於ては何を意味せるか。アウガスチンの神學に歸りたることを意味せるなり。又此の運動に對抗して滔々たる頽波を捲き返し、耶蘇會社となりフランシス・ザビエーの東洋傳道となりトレント會議となり所謂反抗的改革の勢力の源は何處に存するか。其の始め西班牙の偉人ヒメネスが西班牙の教會の宿弊を掃蕩するとともに紛々たる中世末の神學を去りて系統の大なるトマス・アキナスの神學に歸りたるより發したる勢力なりと見るを得べし。一はアウガスチンに歸り、一はアキナスに歸る。此の間の逕庭より世界を兩分したる大勢力は生れ出でぬ。

今や思想の世界は糾紛を加へ混亂を極めつつあり。ひとり我が國に於て然るのみならず、世界の全局面に於ても亦然り。人は適歸する所を失なへり。何處

に歸らんか。これ多く人の嘆なり。自然主義の如きこれ亦これ歸らんための戰なるべきも未だ歸るべき處を與へず。チャールス・ラムの言ひし如く第一流のものは常に健全なり。必ずや偉大なる思想家現れて此の亂れたる思想を整理し、複雜を經たる單純に歸らしめ、健全にして雄大なる系統を立つるものあらん。然して斯かる思想は必ず人類の歴史に根ざし、或る源頭に歸りたるものなるべきも亦古來の歴史に照して預言し得べき所ならん。今や我國に於て再び漢學を盛ならんとする現象を見る。支那の古典が人心の求むる所を與へ得べきやは別問題として兎に角今日の文士學者の與ふる能はざるものを歴史の洪流に探らんと欲する渇望は觀取せられ得べし。

基督敎は言ふまでもなく歴史的の宗敎にして、歴史上の人物なる耶蘇基督を經て神に歸り得べしとの信仰に基けり。故に歴史の價値の認られざる處に於ては基督敎は時代の思想との連結點を見出すこと困難なるは自然の理なり。第十

八世紀の世界觀を支配せる思想は自然の道理の二の外に出てず、歴史は此の二者の與ふる所の外に與へ得ることを信ずる能はざりき。是に於て天啓は無視せられ宗敎は超越神敎の如く歴史的の基礎を除きたる宗敎となれり。第十九世紀の思想は此の種の思想と戰ふて歴史に歸り得たり。自然の理法の與ふる所のものを與へ得るものは歴史なりとの思想はヘルデル、ヘーゲル、ランケ及び「ロオマンチシスム」等によりて開拓せられ、二の新しき思想は見出されぬ。人格てふことは其一發展てふことは其の一にてありき。斯くて總ての事は歴史に照して研究せられ、總ての眞理は歴史の上に發展せらると思惟せらるるに至れり。此の如き思想は基督敎に近きもの多きが故に、基督敎の思想神學ともに大に生長繁茂すべき風土を此處に見出だし得たり。

今日の戰は何處に存するや。歴史を重ずる精神より出てたる發展の思想と自然科學より來れる進化論とは相合して進化てふ思想は萬般の問題を解釋し得べ

き鍵と見做さるるに至りぬ。これ現代の思想の一特徴なり、此の進化の思想が人生の見解に及ぼす所の影響如何。

ルウドルフ・オイケンの「靈の生命」と名くる書は這般の問題に就きて穩當なる觀察と解釋を與ふる所多し。余輩は近來堂々たる議論に接すること少きを感せる時に當り此の書を讀んで幾度か快を呼ばんとせり。彼は第三章「時と永遠」を論ずる條に於いて說いて、曰く從來の見解に從へば人生最高の目的は永遠と云へる側面より我生活を營み、或る永久なるものを我が生活に現存せしむるにありき。不變の理想を掲げて行爲の案内となし此の理想に照してあらゆる畫策を商量して之に合せしめんとせり。然るに是の如き事は過去の時代のものとなりぬ。今や不變の理想を追ふにあらずして、出來得るだけ時代の潮流に伴ひ變じ行く刹那に我が生活を連結せしむるこれ人生の能事なりと見らるるに至れり。人生の成功と失敗は此の變化に適順し之を捉へ得ると否とによりて判たることとなりぬ。すべての物に附せらるる價値は流動的となりぬ。斯かる思想の

利害如何と云ふに人生の見解に自由と新鮮と適切を附與せしは其の利益なり、之とともにこれのみにては人生の總ての事動搖の波に漂さるるのみにて之に照らして一切の運動を了解し支配すべき一定の標準を見出だし難きこととなる。これ我等の堪へ得べきことにあらず。是に於て近世思想の始より何等かの一定せるものを見出さんとする努力はなされつつあり。其の一は哲學の立場より出てデカートを始めスピノザ、ライブニッ、カントいづれも永久不遠なるものを見出さんと勉めざるはなし。他のものは自然科學の方面より之に達せんとし、法則の觀念に之を得んとす。孰れも未だ完全なる勝利を得るに至らずと雖も成し得たる所亦少しとせず。

オイケンは更に論じて曰く進化は最後の語にあらず、進化ある所に歴史なく歴史ある所に進化なし。歴史はたゞ進化するままに成り立ち得ず、行爲と決意

なくんば歴史あるなし。眞正の靈的生活は時以上に超越してあり得べしと。

宛も十九世紀初年の學者は自然法に對抗して歴史の價値を維持したる如く、今や進化に對抗して歴史に歸らんと力めつつあり。

基督教の信仰より云へば我等の歸るべき所は極めて明にして耶蘇基督に歸る外あるべからず。たゞ我等の歸るや倦怠の氣を以て歸るべきにあらず。あらゆる高等批評を去り、進化論を去りて基督に歸り基督の前に跪くべしと云はんか敬虔の形ありて倦怠の氣あるを免れず。焉ぞ如かんや。あらゆる高等批評を了解し種々なる疑問と戰ふて後基督に歸らんには。問題は基督に歸るや否にあらず、基督に歸り、基督によりて神に歸る、これ明なる事なり。たゞ如何にして基督に歸るべきやこれ問題なり。

我等は如何にして基督に歸らんかここに疑問は存す、ここに戰なかるべからず。戰ふて後歸らん、歸つて復た戰はん。

耶蘇を知る機會

我等耶蘇を知る機會あり得る所以は、耶蘇自ら知らるるを待てばなり。深山の櫻は見る人なくとも咲き匂ひ人訪はぬ野邊をも秋の花は彩れども、彼等も猶ほ無意識的に人の來り見るを待てる風情あり。鑛物結晶植物の纖維孰れも科學の智識と機械の進歩と待ちて其の驚くべき構造を示さんと欲するものの如し。されどこれ等は無意識的なり。心ある人となれば眞に己を知りくるる人、己の心を打ち明け得らるる人に會はんことを待ち望む。マアク●ルウサアフォルドは其の自傳のうちに下の如き事を記したりとかや。其の一生の願は己が胸に秘めたる最も深く最も悲しき思想を語り合ふ友を得るにありき。然るに彼は告白して曰く我は餘り多くを期待したりと。彼は終に斯かる全き友を發見せずして了れり。斯くて己の潜みたる心深き願をは胸一つに藏めしかば、何となく打ち沈

みて又冷なる心持に襲はれて之を振り拂ふ爲に長き年月を要したりと云ふ。思想深く情感の濃なる人にはかかる經驗多かるべし。

友となりたく待ち焦がるる人には此方よりも友情を運ぶは義務なり。心を知らしたく思ふ人なれば其の心を知らんことを勉むるも亦義務なり。まして其の心を知ることが我に益あるに於てをや。

耶蘇を見る機會一樣ならず。我等忽焉として彼を發見することあり又長き年月の經驗を積んで次第に深く耶蘇の心に辿り入ることあり。クロオと云ふ人の連續せる說敎なる「主の秘密」なる書より二の例を借らんとす。フランシスガルトンと云ふ人記して曰く、嘗て以太利の豪傑ガリバルヂイ英國に來りし時ガルトンはトラファルガア、スエクヤーに立ちて之を見たり。馬車は粗造なる幌馬車にして着物の風には頓着せざる以太利人の詰め込むばかり乘り居れるなか

にガリバルヂイは獨り立ち居たり。其の顏に現はれたる單純と善良と氣品はいたくガルトンの心に印象して、其の昔し耶蘇が一度ならず群集の上に與へたる感動は此の如きものありしかと前にも後にもなきほどに實覺し得たりと。

實に心ゆく話なり。耶蘇の面影はたゞ冥想の室に浮ぶにあらず、人の海の間に馬車を軋せ行く英傑の顏に映ることもあるなり。然れども又別なる種類の經驗もあるなり。或る妙齡の婦人一夜心に不安を感じて、語るべき父母あらばと思へども兩親ともに亡し。我が身は何となく神に離れしやうなり。日曜學校を敎へ敎會の事にたづさはり居れども、我が亡き母が基督の事を考へし如く考ること能はざることを思へり。かくて寂しき道に出で空を仰ぎて基督を念へり。其の一生、其の御言、其の純潔無垢なる品性、其の十字架を深く思ひぬ。靜に立ちてしばしば心臟の鼓動も止みしかと恠むばかりなりき。然して後潮の寄せ返すが如く嚴なる確信心に溢れたり。何ものかに捉へられしやうに覺えたり。

然して此の婦人は主を信じ彼を告白せんと欲する熱心を湛へて家に歸りたりと自ら語る。

此の婦人の經驗亦頗る自然なる所なり。誰しもかかることあらまほしく思ふべし。されど耶蘇を知り得る機會は樣々あり。一夜の深省の裡に彼に歸ることあれば、又長き生涯の間しみ〴〵基督の恩惠を味ひ、いや增す知識を得ることもあるべきなり。喜にも悲みにも耶蘇を索め耶蘇を知る機會は與へらる。然れども神の保護攝理と云ふ事を多く思ふときと、基督を思ひ慕ふときと自から別るることなるが如し。實際上苦み惱みのうちには耶蘇を知ること多きかと思はる。パウロが耶蘇を知ると云ふことを說くとき其の苦に與ると云ふを主としたるは之が爲なり。苦むてふことは最も切實に心の底に達するが故に、我等の心を柔にして耶蘇の心を學ばしむる力あり。然らずんばただ憧れ慕ふ方面より耶蘇に近きしもの、後には十字架の惱を思ふて慰められ、其の上より流れ出づる恩惠に靈魂を浸す種類の經驗に進むならん、

之とともに我等の苦をして耶蘇の苦と大に異ならしむる一のものあることを見出すならん。そは何ぞや罪なり。我等は罪ありて配處の月を見る如き心地して、基督の苦みに與るなどと云ふとの比倫を失するを恐れしむ。ここに於て基督は我を慰むるもの我が友たるのみにては足るべからず。基督仲保となるが爲に我れ僅に神に近くことを得ることを發見すべし。これ基督を知る大なる機會なり。基督のうちに神を知り、神の光に照らされたる基督を知る。願くば主よ我等をして日に日に基督を知ることを學びて十字架の下に近くことを得せしめよ。(四四、九)

基督の死生に根したる道德

「既に汝等キリストと偕に甦りたれば天に在るものを求むべし。キリスト彼

基督の死生に根したる道德

處に在りて神の右に坐し給へり。汝等天に在るものを念ひ地に在るものを念ふ勿れ夫れ汝等は死にし者にて其の生命はキリストと偕に神の中に藏れをるなり我等の命たるキリストの顯れんとき我等も之と偕に榮の中に顯るゝなり。」（コロサイ書三〇一—三）。

保羅は基督教の道德を說くに當りて基督が此の世に有り給ふた時斯く敎へられた、斯く行はれたから我々も其の通りしなければならぬと云ふ風に說いた所は比較的寡い。彼は寧ろ基督が僕の貌を取つて世に降られたこと、其の十字架の死、及び復活の大事實を掲げて、基督敎道德の根本此に在りとして居る。啻に之を道德の模範とするに止まらず道德の鼓吹力をも其の生命をも此等の大事實に求めたのである。彼は幾度か之を力說して味窮りなきを感じたものと見える。其の點我等に取つても實に味深き所である。單に模範である事は案外感化の少いものである。更に進んでそれが鼓吹力であり、生命であり詩であり救で

あるに至つて人に徹するものとなり得るのである。

今や年改まりて我等の精神生活を刷新し再建設せんとする志新なる時に當り保羅が如何にこの點を說いたかと云ふ事を研究するは、益あることであらうと思ふ。主題としたコロサイ書中の數節は多くのものゝ一である。以下基督者たるものゝ實際生活を敎へんとするに當り先づ救主の死と復活とを說き、信者が此の事實に參ずる所以を說いて、根本義を立てゝ居る。

「汝等キリストと偕に甦りたれば天に在るものを求むべし」保羅は耶蘇の死よりも復活を先に說くことが多い。ピリピ書三〇十にも「彼は其の復生の能力を知りそ の死の狀に循ひて彼の苦に與り」と書いてある。保羅は先づ復活の主に接して後十字架の實驗に進んだから、先づ其の考に浮んで來る事が復活であつたのは怪むべきことでないのみならず基督者一般の經驗にも之に相通ずる所があるではないか。基督を信じたものは基督とともに甦つたものである。エペ

ソ書二〇一に「神は愆と罪に死にし所の汝等をも生したまへり」とある。

我等は罪と死の境のなかから甦つた。我等の此の復活と基督の復活とは親密なる關係がある。其の次第を説くとなると神秘の領分にはいることでこゝに盡すことは出來難いが、基督を甦らした神の力によりて我等も生れ更つたと云ふことは其の一である（エペソ書一〇十九、同二〇五）。更に深い理由は基督罪と死に勝ち給ふたにより て我等にも勝利があり 得る事 である。さて我等 基督と共ともに甦つたからには如何にすべきであるか。保羅は曰く天に在るものを求むべしと。更に第二節に於ては「汝等天に在るものを念ひ地に在るものを念ふなかれ」と書いてある。この求めと念ふとの區別は何であるか。求むるとは之を得んとし精神を向け力を用ひることである。之を現實にせんと欲する要求である。耶蘇が「神の國と其の義きを求めよ」（馬太六〇三十三）と云ひし其の「求めよ」と同じ文字である。念ふと云ふは之を慕ひ之を愛し之に心を寄することである、欽定英譯には seek your affection と譯してある。孔子の言に知之者不如好之者、好之者不如樂之者と云ふことがあるが、こゝに念ふと云ふなかには好み樂むことも加はつて居る然らば之を求め之を念ふ對象は何であるかと云へば天に在る者である。天と云ふのは精密なる譯でない、原文には上にあるものとなつて居るが、實際は天と云ふと大なる差は無い。上にあるものは靈的の事物である、神に屬する事である、肉の要求、肉の慾を充たすものでない。基督者の志の向ふ所、愛を寄する所、望を繫ぐ所一に此の世界にあらねばならぬ。

「キリスト彼處に在りて神の右に坐し給へり」これは「上」或は「天」を説明したものである。基督者の天は儒教の天、天文學者の天ではない。主基督の在ます天である。我等の尊み、慕ひ、憧る基督の在ます處である。基督と神と最も近き交通ある處である。愛せし人の生れし里、住みし地は言ひ難く懷しいものである。又愛する子兒或は同胞を天に送つた人は今までよりも天が近く慕は

しい處となるであらう。我等の基督に對する愛が厚くなれば、靈なる世界の空言ひ難く慕はれて、汚れたる事、罪に屬する事、肉に屬する事に些しも引き着けられざるやうになる筈である。タンテはベアトリチエを愛して「君のため我は鄙俗なる群を離れぬ」と歌ふた。基督者の道德には斯かる芳芬があるべきである。

前に言つた如く保羅は復活より漸く死に移つて來る。曰く「夫れ汝は死にし者にて其の命はキリストとともに、神の中に藏れをるなり」。羅馬書六〇二には「イエスキリストに合はんとてバプテスマを受けし者は卽ち其の死に合はんとて之を受けしなるを汝等知らざる乎」とある。我等が洗禮を受けたとき舊き生活、世俗の生活に對しては死ぬるものとなつた。然して其の生命はかくれたる生命となつた。人の目に顯れない、何を樂み何によりて動き何を目的として居るか、世間の人には解らぬ。しかし其の生命は神の中にかくれたる生命である。

人の目に隱れ神てふ秘めたる泉によりて養はれたる生命である。

肉の生活に對して死ぬることは、第五節の下に具體的に說明してある。奸淫、汚穢、邪情、惡欲および貪婪を殺すべき等の事卽ちそれである。斷乎として此等の卑き生活を脫せねばならぬ。之を爲し得る動機は耶蘇の十字架の死に存する。ペテロ前書には「キリスト旣に我等の爲に肉體の苦難を受け給ひたれば汝等も亦その心を以て自ら鎧ふべし」(四〇一)と書いてある

保羅は耶蘇の復活と死の事實と我等の道德的生活との關係とを斯の如く說明した。此關係の各方面を說き盡したではないが、最も緊要なる點を說破した。これ彼の實驗を語つたものである。省て我等の實際生活に於て基督の復活と死がどれだけ働いて根本となつて居るであらうか。又どう云ふ風に根底となつて居るであらうか。細心に省察すべき問題である。

保羅は百尺竿頭一步を進めて基督の顯現と我等の生命の望との關係を說いて

居る。道德的の生活の一要素は望である。志なく望なき人の道德には生命が無い我等は望によりて自ら重んじ罪に克つことが出來る。保羅は此の望を說いて曰く「我等の命なるキリストの顯れるとき我等も之と偕に榮の中に顯るるなり」と。ここに於て先づ大切なのは基督我等の生命であると云ふ事である。基督の顯るると云ふは其の再臨を云つたものであるが廣い意味に於ては基督の稜威大に輝く時である。たとへば日本の皇帝の威德四海に輝く時は日本國民たるものの地位も高まる如く、基督の榮の顯るる日は卽ち基督を以て生命とせるものの隱れたる生命爛熳として咲き榮ふる春である(三一一)

精神的脈絡

所謂シーメンス事件に關する一片の外國電報は現內閣の基礎を撼かすほどの大波瀾を政海に捲き起した。此の如き大騷ぎをするのが果して良い事であるが

余はさうは思はぬ一人であるが、それは別問題として、不德義な事をする人達が世界的の連絡をつけ氣脈を通じて居る一端が此處に暴露せられたのである。基督の敎の內に、不義なる番頭の比喩と云ふのがある。その番頭は主人の金を消費したことが暴露して職を奪はれねばならぬ際に當つてその主人に負債ある人々を呼び集めて、油百斗の證文は五十斗にしてやり小麥百斛のものは八十斛に書直さし、私恩を賣つて置いて困つた時に身を寄せ得る餘地を造つたのである。基督は此話をしてさて、此世の輩は此世に於て光の子等よりも遙かに巧みであると言はれた(路加傳第十六章を見よ)。實際惡人が氣脈を通じて惡い事を巧なむほど善い事をする人々の間に連絡のついてゐない經綸の立たぬ事が有りがちである。所々に孤立して居る精神的の力、善に向ふ勢力を糾合し脈絡をつけて、溫かい血が璫環するやうにした人が社會に於て大なる革命を起し得た人物である。

自分は脈絡と云ふ思想を何となく面白く感ずる者である。此思想を中心として擴張して行けば精神的の眞理に或る光を與へる事が出來ると信ずるが今はそれ程までに考が纏つて居らぬ。僅に斷片的の感想を述べるに過ぎない。此樣なことを考へしめるのは興味が先になつてゐるかも知れない。例へば鑛山や石炭坑が脈をなして居る。最早や掘り盡したと想ふてゐたときに、端なく大きな脈に掘り當てるならば無盡藏の富を採り出すことが出來る。思想の歷史にも之に似たる事實が屢々あるのである。又横須賀などに行くと山の上に高い二本の柱が立つてゐる。これは無線電信に用いる柱であつて、二の柱頭から幾千哩程も遠い海の彼方を走つてをる船と交通が出來ると思ふと一種悠遠な感じを起すのである。是等は自然と自然との間を繫ぐ脈絡であるが更に人と自然界との間に一種の脈絡が通つて居ると云ふ事も考へられるのである。幼い頃から聞いた狐が化けて居つたと云ふ「葛の葉」の物語、または柳の精の話なども妙に我が心を

魅する樣に覺える。人の魂と動物植物の生命との間に一種の神秘なつながりのあると云ふことはあながち神話や小說ばかりではない。西洋の聖者の話にも色々不思議なことがある。此點から考へて進化論と認識論と云ふものを非常に面白く思ふ。此二つの思想は近世の學術が人類の思想になした最も大なる貢獻であるが、二つながら我と天地萬有と脈絡相通じて居ると云ふ考に學術的基礎を與へたと云ふ事が出來る。進化論と云つても何も犬や猿から人間が出來たと云ふ譯ではないが、犬となり猿となつたその本と人類が出て來た本と全く離れたものでなくして、一つの生命の通ふて居る木のやうな者であると云ふことを明かにしたのが進化論である。認識論もさうである。それ迄は人と云ふ者を離れて花は赤く空は青く鐵は堅いものと思はれてゐた。然れどもその赤い色も青い色も堅い性質も、或は時間空間までも「我」の貢獻するものであつて、或意味に於て現象世界の創造者は我であると云ふ事實を明かにした。進化論に依つて我

は宇宙の生命に這入り込むやうになり、認識論に依つて宇宙が我の生命に這入り込むやうになつた。「聖書の言葉を借りて云ふならば宇宙と人との間に「汝我れに居りわれ汝に居る」と云ひ得る關係のある事が明かにせられたのである。

次には「我」と他の思想と脈絡の通うて居ると云ふ關係を考へて見たい。大抵人には十年二十年三十年の昔、別けても思想の盛に生長しつゝあつた時期に、讀んで自分の血となり肉となつて居る書物がある。其書を讀み其著者のことを思ふと、曾て其書を讀んでそれに飛び付くやうな氣持ちがした昔の我れ、或る意味に於て淸い我れが復活して來るのである。また或る思想に接すると自分の內にあり乍ら今迄自覺することの出來なかつた善いものが呼起される事がある。文藝復興時代の畫家コルレギオが初めてラファエルの畫を見たとき、やゝ暫く我れを忘れて其前に立つて居つたが軈て「我れもまた畫家なり」と叫んだと云ふ

話を私は面白いと思ふ。師無くして畫を學んで居た彼はラファエルの作を見る迄は、畫家になれると云ふ自覺がなかつたのである。是に於て靑年時代卽ち我れなるものが呼起される時代には、出來るだけ高尙な淸美な雄大なものに接する必要があるのである。或人が讀書の法を書いて居つた中に、自分が最も深き興味を感ずる著者を中心にして段々研究範圍を大きくし深くして行く方が得策であると云つてゐたが實際誰れにもかう云ふ引力を感ずるものがある、その人の傳記ならば新しい本が出る度びに買つて讀みたい、其人に關する評論ならば我が骨肉の評判を聞く樣に思はれると云ふ人がある。さう云ふ研究題目を見出すのは卽ち我れを見出す所以であつて、之を見出し得た時に自分は初めて大なる思想の流れ、精神界の地圖に於て手を着け脚を立て得べき地點を見出したものである。

是も自分の小さい趣味に屬するが、例へば柏木や中野あたりを歩いて居る內

に「萬世橋行き」と云ふ札の掛つた電車を見る、それが直ちに都の中心に通うて居ると思ふと多少の愉快を覺へる。二日三日かゝる遠方の地で「上野行き」或は「新橋行き」の汽車を見ると、その面白味が一層擴張せられる。曾てニウヨオクを去り大平洋岸指して歸る途中、ロッキイ山あたりでニウヨオク行きの汽車に摺れ違つた時是が暫く住み慣れた彼方のニウヨオク行きかと思つた其心持ちなどは今も忘れることが出來ない。昔物徂徠が伊藤東涯の京都に遊學するを送つた詩に、五十三驛莫言難、處々山川秋好看、明日先從函嶺望、如絲大道達長安と云ふのがある。多少懸け離れた處から一路直ちに一國の大都、若くは世界の大都に通じて居ると云ふことに吾々の心を引立てる感興がある。東京の或る牧師が初めて富士山に登つて歸つて來て、初めてロンドンに着いた時以來の愉快であつたと云ふ話であつた。學問思想の海に棹さす者の愉快もまた同じ理屈であつて、自分の耕して居る小な思想の畑を通つて居る徑はこれ卽ち世界的思想

の中心に達してをると思ひ得るからである。獨り學問ばかりでない、宗教生活に於てもまた同樣の快味を味ふものである。差當り一冊の聖書これは二千年以來の宗教歷史の發展の中心生命になつたものである。然るに自身の此薄弱な小さい宗教的經驗を以てして聖書と云ふ宗教思想の羅馬と血脈相通ふことを感ずるのは何たる特權であるか。此の三四年以來自分はパウロの研究に深い興味を感ずる。パウロに關する新刊の書籍が紹介せられてあるのを見ると之を買つて見たいと思ふ誘惑に抵抗するに少からぬ困難を感ずる。外の文學者や詩人を我れに近く感ずるよりも更らに切實な意味に於てパウロと我れと近いことを感謝するこれは多くの人の感じであらうと思ふ。若しパウロがなかつたならば基督によつて與へられる內的經驗の價値を如何に解釋することが出來るであらうか、而してパウロは當昔の我れと脈絡が通ふて居たばかりでなく、段々世の中の波に揉まれて行く間に我れを勵まし、我れを慰まし、より善き我れを喚び醒す力と

なるのである。又パウロにつきて獨特の事は、パウロ一人でする經驗を觀るでなくして、パウロが基督に對して有する經驗を觀得る所に最も大なる意味がある。彼の經驗はすべて基督との交渉である。パウロを學ぶは卽ち基督を學ぶ所以である。

耶蘇は「我れは葡萄の樹、汝等はその枝なり」、と云はれたが實際耶蘇に接するときパウロに對するよりも更に深き關係に於て我が魂の底に脈絡が通ふて居るやうな心地がする。獨り我れのみならず、世界の人類は皆な基督に通ずる或物を有つてゐるのである。羅馬書第七章を讀んで共鳴する經驗をもたぬ單純な魂でも、耶蘇とサマリヤの婦人との話を有り難く思はぬものはない。それ神は宇宙に滿ち充てる神である。これに求むれば與へられ、これに祈れば答へ給ふ神である。神と我れとの間に何故基督を要するか、それは喩へて言へば、人間の身體の何處を切つても血が出るのである。然れども弱つたる體に健かなる血

を注入せんとするときには脈管を開いて血を注入せねばならぬ。宇宙に充ち滿てる神は基督と云ふ脈管を經て宇宙に滿つるのである。更らに適切に云へば基督は我等の心臟である。此心臟あるが故に我等の精神生活の脈絡が出來、統一が出來るのである。どうしてさうであるかと云ふことになると、說き盡し難い秘義であるが只一つのことを云へば、人と人とをつないで居る脈絡は色々あるが、凡そ苦痛と云ふ脈絡ほど人と人とを接近せしむるものはない、汽車の乘り合客と汽船の乘合客とその間の親しみに少からぬ相違のあるのは何であるか、一方は一枚の板の下には幾十尋の淵がある。共に危險を冒してゐると云ふ恐れが互ひの心を結び合せるのである。人類の苦痛と云ふ此深いまた强い脈絡に手をつけて之を靈的生活の中心に結び合したものは何であるか、基督の生活である。殊に十字架の苦難と死である。贖罪論と云ふものが時代により解釋を異にし、また滿足な解釋を得るのは中々困難であるに拘らず、永久に人を動かす力

のあるのは、詰り此の脈絡系統に係はつて居るからである。

説いてここに到り我等の思想は更に根本の脈絡に移らねばならぬ。今まで考へ易く解き易い爲に興味もしくは自然の要求と云ふやうな事から考を起したのであるが、小河大川辿り行けば如何なる淡水も必ず鹹なる海に朝する如く、人生の脈絡終に道德的脈絡に歸着するのである。鹹のなき海はない如く人生の海には必ず道德がある。意志の脈絡に觸れずんば全人格は鼓動しない。道德の道によらずんば人類の内に散つて居る善きものを糾合し統一することは出來ぬ。道德が紊亂すれば國は瓦解するのである。

我等の宗教的經驗もその起點は如何にあらうとも、結局强烈なる道德的精神の鼓動して居る天地にはいるまでは支脈をつとふて居るやうなものである。終に罪と救と云ふ舊い問題舊い事實に打ちつかるときに初めて最も深く最も大なる靈絃の鼓動を感ずることが出來る。

耶蘇十字架に死ぬるまで聖靈が降らぬと聖書に書いてある事はなか〳〵解し難き事であるが、この點から考ふれば思半ばに過ぎる所がある。聖靈は機械的に働くものでない。耶蘇の犧牲に現れた崇高な道德的の力に觸れるとき初めて神の靈の感化を受け得る要素が整頓して來たのである。

耶蘇は其の身を以て靈的脈絡に繫がつた社會卽ち神の國を建て、世界に蔓つて居る罪惡の脈絡を破壞しやうとせられたのである。思へば何たる大なる志であるか。此の國の中心生命は何であるか。道德的の愛である。

然らば如何。願くば我が國をして大なる世界的精神系統の一部分となしたいものである。基督教會に於ては愛の脈絡があらゆる所に行き屆いて貧しひもの小い者苦んで訴ふる所あるやうにしたいものである。利害の爲に滿足を得る爲に相繫るでなくして道德的の志に於て愛に於て繫りたるものである。大なる者に媚びず、小き者を輕んぜざる重厚の氣風がありたいものである。個々の修養

から云ふと出來るだけ系統のある思想に訓練せられ、大なる精神系統に連り、良き團體に連り、良き人々と氣脈を通じて精神的の戰を戰ひたいものである。斯くて次第に基督の血があらゆる社會に流れ入つて之を潔め之を一にする理想に近づきたいと思ふ(三、三)

人生觀と歴史哲學

大隈伯の近著「開國大勢史」のうちには幾度か大勢と云ふ事を說いてある。「大勢に順ふ者は興り大勢に逆ふ者は亡ぶ。是れ物界の原則にして又人生の通理なり」と劈頭に書き起してある。物界の大勢と云ふは何であるか漠然たる話であるが、人間世界に於ける大勢と云ふことは略ぼ解る。しかし其の大勢なるものは果して如何なる性質を有するか。序論の結末に曰く「然れども天祐常なし幸運は恃むに足らず、恃む所は人事にあり。然らば則ち國家の取るべき道如何。

曰く善く大勢に順ふに在り、善く大勢に乘ずるに在り善く大勢を導くに在り」と。矢張茫漠として眞意を捕捉することが困難であるが、此の大勢たるものは天意でもなく、又運命でもなく、人事の集積して成す所の傾向趨勢を云ふ樣に察せらるる。學者の進化發展の理法と名くるやうな種類であるか。伯は大勢と云ふ論を以て歴史の事象を解釋し得べしと信じて居るやうである。

此の頃「ジャパン、アトバタイザー」紙上の或る批評家此の書を批評して云ふには、歴史の見方に二の流儀がある。カアライルとトルストイが各一方を代表して居る。カアライルは世界の歴史は英雄の傳記であると云ふ。卽ち人格を中心として歴史を觀る。トルストイは寧ろ底を流れて居る潮流に支配せらるる所から歴史を觀る。大隈伯が頻に大勢と云ふ事を說くを見るとトルストイの流派に屬するものであるかと。無論精細な思想ではないが多少我等の考を惹き起さしむる點がある。トルストイの思想はすべて半ば東洋的である。トルストイ

の小説には英雄が無い人格が無い、ただ犧牲あるのみてあると云ふ批評に若し當れるものがあるとすれば、然してトルストイの人生觀が果して是の如きものてありとすれば、其の歴史觀も亦同じ傾向に支配せられて居ても少しも怪むに足らぬ。それにしても根本的な社會革命の理想を持つて居たトルストイの歴史觀は伯大隈の大勢論とは日を同くして語るべきものではない。

時勢と云ひ大勢と云ふもののあるとは論を待たぬ。然れども大勢なるものは決して單一なる者てない。向上の勢力もあり墮落の勢力もある。或る大勢には適順しなければならぬが、或る大勢には反抗の態度を執り赤手を以て江河を支ふる苦戰を試みねばならぬ。傾向に任せて置けば個人ても社會ても必ず墮落する。世界の精神的進歩は低きに就く大勢に抗して戰ふた人によりて成された。希伯來民族の間に於ける預言者の如きは卽ちそれてある。歴史の見方から云つても同樣てある。流れをのみ見て創始力の泉を見ぬ歴史觀は決して公平てない。

ここから歴史を超越した人にして始めて歴史を作る勢力となることが出來ると云ふ考が生ずる。この一點を良く論ずる人はオイケンてある。歴史は單に進化發展の過程てない。進化ある所に歴史がなく、歴史ある所に進化がないと云ふことは此人の好んで說く所てあるが、近頃波多野宮本二氏の合譯に成れる「新理想主義の哲學」のうちにも痛切に同じ主張を述べた處が少くない。其の一に曰く「それ故に歴史を萬能となし人間を全然單なる歴史的存在にすることは極力斥けなければならぬ。この歴史萬能說は結局獨立せる精神生活を棄てると共に總ての精神生活の根抵を破壞するものてある。人間は其の精神性の核心に於ては超歴史的のものてある。只その精神性を一層具體的に實現し而して完全に同化してのみ歴史的てある。人間は歴史から自然に發展するよりも歴史を材料として自己を形成するものてある。顧慮する所なく歴史に任かすれば只起

つたものを尊敬する。事實の盲目的崇拜となるか、或はあらゆる手段を講じて存在を合理的に説明せんとする不眞實なる彩色となる　この兩者は必ず歴史を仇敵とする急進主義の反擊を喰ひ、そして此の淺薄なる主張に理由を與へる。かかる困難を免れるにはただ單なる歴史から超時間的現在に轉向する外はない」。

我が國民はこのやうな史觀を了解する必要がある。此處になるとカアライルの歴史論に面白い點がある。彼は自然の勢をのみ見ずして人格の力、偉人の力を認る。然しながらカアライルの歴史觀には又大なる缺點がある。彼は人格に於てあまり多く力と云ふことを崇拜する。其の力は必ずしも倫理的の力でない。クロムウエル傳を書いた筆を以てフレデリック大王の傳を書いた。適種生存優勝劣敗と云ふ事を中心として立てたダルウキン時代の進化説をそのまま人生觀に應用したのがニイチエの思想である。カアライルはニイチエよりは倫理的であるに違ひないが矢張力の崇拜者である。今日の日本人の大多數は運命論者でな

くば勢力の門徒である。例へば今日山本伯を褒めて西園寺侯を貶す人が多い。山本伯を褒めるに對して不同意はないが、西園寺侯の見方には贊成し兼ねる。と云ふは力と云ふ點、卽ち能く斷し能く行ふ事から云へば彼は何分此に及ばぬ。然れども殆んど三十年の昔今日の松田法相とともに「東洋自由新聞」と云ふを興して自由主義の爲め戰を始め其の筋の壓迫を受けて廢刊した。其の事情を書いて世に訴へた。軟かな少年の頭腦に印せられたその文章の幻影が消されぬうちは、余輩は西園寺侯の今一度政界に復活せられんことを望まざるを得ない、何となれば余は主義のない力の人よりも、縱し力は足らずとも長く一の主義を抱いて立つ人を讃美したいからである。

其處になるとマジニイの歴史哲學は遙に高尚である。彼は謫客となつて倫敦に在るうち熱心にカアライルの「英雄崇拜論」の講筵に列した。然るにカアライルが最後の講演に於て那翁を讃するを聽くや怫然とし不同意を表白した。マジ

ニイは其の論文のうちにもカアライルの史論を批評して居る。マジニイが云ふにはカアライルはただ一個人を認めるばかりで一の國民に於ても人類に於ても總合的の生命、總合的の目的ある事を認めぬ。人類の運命を宛ら昔の譚にある自身の尾を喰ふ蛇のやうに觀て居る。王政から貴族政治に、貴族政治から民主政治に、民主政治から無政府に、無政府から專制政治に、何時までも循環する。人類の欲情と煩悶が相觸れてこのやうなことになると云ふ見解であつてこれを循環運動學派と稱へる。マジニイの評によればカアライルの歴史觀は歸する所宿命說になると云つて居る。

カアライルは人格を認めたが、倫理的要素を缺いだ所から汎神的となり運命論となつて了つた。我々の歴史哲學は倫理的でなければならぬ、否、倫理的の人生觀のない所に歴史哲學は成り立たぬ。ドロイセンの「歴史原理」は小い書物ではあるが、思想に滿ちた書物である。彼は曰く歴史の人を敎育する力は道德

的の力に參する。人は道德的の力に參する程度に於て歴史の生命に參するものとなる。この道德的の力なるものは、各自己の天地自己の世界を造りその裡に立て籠るとともに又これを携へて出で來り其の爲に勤勞することを要求する。歴史の問題は自由か必然かと云ふでなく道德的なる人の自由である。最高善の爲に活くるのが最高の自由である。

我等の重ずる大勢は唯物的の勢力にあらずして善の理想を實現せんとして進む大勢でなければならぬ。單に適種生存の法則のみを見る進化發展でなく倫理的要素を認める進化の大法でなければならぬ。然うすれば人格の勢力を認る者となる。

基督敎は此の倫理的人生觀を與へることによつて世界に歴史哲學を與へた。希臘にも印度にも歴史哲學はなかつた。歴史哲學は舊約の預言者とパウロとグノオシス宗の徒とアウガスチン等によりて與へられたではないか。(二、七)

宗教と國民の情調

孰の國民にても國民性の底に流るる情調と云ふものがある。如何なる宗教にも其の宗教を活かして居る情調がある。此の情調と彼の情調と互に相通ひ相響くとき、宗教が國民のものとなるのである。

儒教が日本國民の情調に觸接したとき武士の情武士の道と云ふ花が咲いた。佛教が別なる琴線に觸れたとき印度の佛教にも支那の佛教にも見ることの出來ない美なる生命ある佛教が產み出された。

ひとり宗教ばかりでない近くは乃木將軍の死が國民に斯の如く深且つ大なる波動を及ぼしたのは何が爲であるか。武士道と云ふ格に嵌まつた行爲をした爲であるか。さうでない。彼の一生を通じて之を支配して居つた情調、無論養はれ錬られて澄み來つた情調であるが、これが國民の深い腸に響きて之を喚び醒ましたからである。淵と淵と相答へたのである。

基督教は如何であるか。如何にせば基督教を我が國民の生命に徹底せしむべきやと問ふものがある。余輩の答は至て單純である。基督教其のものに徹底するは卽ち國民に徹底する所以である。

基督教は如何なる宗教であるか。神の國と義しき事の爲に勇む教である、基督の身を殺せし愛に感ずる教である。己を献ぐる教である。これは人の方からである。神の方から云ふと人類の罪と苦惱を憐れむ愛である、救ふ力である。

新約聖書のうち基督の心を最も良く解し良く之を寫し出したものは蓋し保羅であらう。彼の言が千歳の下切々として人を動す所以はここにある。無論保羅は單に情のみの人でない强大なる智力の人である。彼の神學は救拯の勢力の發揮せられた大なる源である。然れども彼の神學は冷い神學でない。溫な情調の脈の搏つて居る神學である。罪から救はれたと云ふ感恩歡喜の念もある、永遠の運命に對する嚴な畏れもある、世の罪を嘆く悲もある、惱める人類を憐む同情

もある。日本の神學も斯の如き神學でありたい。保羅は卽ち絕大なる詩人であつた。詩を作つた詩人でなく詩を實現した詩人である。彼が希臘人の爲めには希臘人となり猶太人の爲めには猶太人となり得たのは能く國民人種の區別の屆かぬ人の心其のものに徹して居つた爲である。

生命を得んと欲する者は生命を失ふ、永久なる基督敎の原形を取捨して生じひに國民の趣味に合はせんとする者は必ず失敗する。之に反して基督敎の底へ底へと沈潛透入するは卽ち日本國民の宗敎的情調に堀り入る所以であると思ふ

日本人には基督敎の或る深い情調を解して前人未發の側面を發揮するに足るものがあるであらうか。余輩はこれありと信ずる。例へば聖書の研究でも學者は別として外國人の中には極めて常識的の所で滿足して居る人が多い。我が心の深い所へ引き寄せて考へやうとしないやうである。ところが我々はどうも其れでは滿足が出來ない。又單に倫理的實行的の規範を得ただけでも何となく滿

足が出來ない氣がする。それならば實行的の所は旣に達して居るかと云ふに、其處になると頗る幼稚であるとは知つて居るが、今少し廻り路をして倫理實行と云ふ所へ歸つて來たい。愉快に實行の出來るやうな調子が着いて然る後でありたい、已むに已まれぬ心から出たいと云ふ要求がある。この要求には幾らか我が儘な所もあるが、全く棄て難い節もあるでなからうか。

主義及び倫理の法則と云ふ觀念よりも寧ろ感激、悲壯、意氣と云ふ樣な氣象に鼓舞せられて進みたい。罪惡さへも露骨にせず美的の色彩を以て包みたいと欲する日本の人民は善い事にも美的の粧をかけるを好む美と云つても澁い處に甘味を見出したい、少し嶮しい處に見地を取りたいと思ふ樣に傾く。爰等が大きな處が缺ぐ所以であるが一方には新鮮潑溂な處も爰から出て來るかと思ふ。

基督敎は或る意味から云へば大なる廻り路をした者である。神を愛せよ、人を愛せよ、この單純な平和な敎でさへ徹底せしむる爲に十字架上の死と云ふ處を

迂回して來ることを耶蘇は必要と思はれた。人を感化する爲に死なれたのでなくて死なれたが爲人を感化することが出來た。茲に淺い種類の道德感化說の解する能はざる廻路がある。日本國民の情操は幾分之を解することが出來ないであらうか。歐米人の未だ見る能はざりし十字架の一面を見る事が出來ないであらうか。

但だ茲に基督は日本人の魂を以ては迚も解し得ぬ迂回をせられた。それは何かと云ふとゲッセマネを經られたことである。從容死に就く事を第一とせる武士道の死には若しかなはゞ此の杯を我より放ちたまへと祈るまでに正直な淡泊な曲折がない。人格の觀念延いては罪の觀念に缺ぐる點がある所からこの相違を生ずると思ふ。

兎に角日本の基督敎は今よりも一層深く十字架を我等の生活と實行と思想と說敎の中心に置く事によりて國民の深き情調を彈じ得ることと信ずる。しかし機械的の十字架では力がない。小かな十字架でもよいから、批評から出た十字

架でなく、信仰の經驗から出た十字架でありたい。又若し出來るならば廻り路をして幾度か歸り來る十字架でありたい。思へば前途遠遠であるが又實に愉快禁じ難いものがある。我が國民が十字架の前に跪く時、今まで歷史により文學により宗敎によつて養はれたる、言ひ難く美しく悲壯なる情調が、合理的の根底を得るのである、探りつつあつたものに行き當るのである。（一、十）

病氣

天寒くして知れる家に病める人あり、長く病床に在る友もあり。之が爲に心を傷むる事多し。然して去年の此の頃は我が家族に重き病にかゝれる者あり、又之と重なりて己も亦病床にて二ヶ月餘を過ごせし事を懷ふ。今夕筆を執るに當りて自から此の題目を思ひ浮べざるを得ず。

我が性質の然らしむる所なるか、病氣の事を回顧するに當りても、病氣の苦

痛よりも病氣によりて忙しき中に休みを得しことや、回復して嬉しかりしことや、見舞くれし人の情けの有り難かりしことなどを懷ひ出づること多し。かゝる性分も良し惡しにて、日々繁劇に暮し居る友人の病めるを聞くときなど、嘸苦しからんと想ふよりも寧ろ、病氣の御蔭にて多大の休息を得るならん適意の書もを讀み得るならんと想ふ方先きになりて、見舞の手紙にもこの類の事を書き易し。或は病の苦しき味を知らぬにやと疑ふ人もあるべきが、知己の友は然か思はぬことゝ信ず。實際餘りに事多くして心身休息を得ざる時には、過度に苦からぬほどに罹りて一週間ばかり休みたきものなりと願ふことも有體に言へば無きにあらず。實際病氣は旅行の如く休息となること多し。余は昨年永く病みぬ。之が爲に半年ほどは近年になきほど身體の彈力を回復したりと感じたり。之につけても思ひ出づるは、六年ばかり前米國に在りし頃稍重き病にかゝり四十日ほど病院に寢ねし時の事なり。天涯の異鄕にて病むは心細しと云へば云ふ

ものの、故國にて病む如き樣々なる係累や心遣ひと云ふ者なき爲にもあらん、前後十年間に復とこれなき休息を味ひしは感謝すべき極みなり。余が居りし病院にては夜八時頃よりはや電燈の多くを消して病人を休ましむる代りに朝は四時になれば室内の電燈を盡く點し顏を洗ふ水を持ち來り一杯の新鮮なる牛乳を與へらる。これより朝飯までは三時間近くもあれば此間仰けに臥し心靜かに樣々の事を考へ且つ祈りぬ。心も氣も澄み渡りて樂しさ限りなし、程なく東の空橙黃色に明け初めて電燈は消され、二重ガラス窓を隔てゝ大都會の活動の響漸く盛なり。尤もそれは熱も絕頂を越して後の事なるが、回復期の間に心持はこれまた比ぶるものなきほど爽かなりき。或る友へンリイ、バンダイクの詩の集を持ち來りて貸してくれぬ。其中の一節を譯して枕頭の手帳に斯く書きつけぬ。

煩多き人生の旅一里をば打ち連れて
誰と歩まん、村里の夕の空に出でし星

今日も暮れ行く靜けさの心を知りて更に又
勇ましく且つ美しく、行路の思を慰むる
言葉を知りて語り得る友と歩まん旅一里

初めて寢臺より降りて一時間ばかり床邊の椅子を許されし日我は書店より屆けくれしニウマンの「ゲロンチウスの夢」を讀みぬ　病勢まだ昇りつゝありて然かも讀書を禁ぜられざりし間同じ人の筆に成る「アポロギヤ」を讀み、彼が伊太利にありて病にかゝりし時「我は死なじ、我未だ光に對して罪を犯さざればなり」と云ひしことなどを思ひて言ひ難き慰を受けしが、今や退院の日も近き時、藍の如き晴空を仰ぎ、果てしなく續ける大都の萬家を眼下に看て、死せし人の靈魂の辿る旅路を歌ひてし清美にして嚴なる詩を誦せし時の心如何に樂しかりしぞ

如何にしてニウマンの此の作を態々註文して求めしぞと云へばそれより前に病床にて讀みしゴルドン將軍の略傳の中にて將軍がいたく此の書を賞し幾冊か

買ひて人に贈りたりとありしを讀みしよりの事なりき。ゴルドン將軍の言にて當時余の書き留めし中に次の如き言あり。

我等は盲目なり。然るに彼（神のことなり）は次第に我等の眼を啓き手痛き困苦の力によりて少しづゝ彼を知るを得せしむ。

靈が肉の爲に掩はるゝ度毎に幕は再び落つ。

最早此の世の奴隷とならぬことを試みよ、此の支配を脱したる時の慰め如何なるか汝の考への及ばざる所――祝福卽ち其れなり。

今猶ほ當時の事を追憶して神の恩に潤ひしことを感謝せざるを得ず。

病める人は心のどかにも思ふことあらん、されど愛する者の病を看護するものゝ心は如何にぞや。かゝる餘裕あるべき理なしとや思はれん。實に看病は一の戰爭なり。一つの敵退きしかと思へば他の敵新手を入れかへて攻め來るに似たり。本病やゝ輕くなりし後餘症を發して命を奪はるゝとも屢々あり。油斷大

敵と云ふことは看病に於て最も忘るべからざる金言なりと知るべし。然れど如何なる激しき病にても鋒先を弛むる時はあるものなり、中夜病めるものは安かに眠りたる時など、一杯の紅茶を啜りて看護の疲勞を休め、偖に在る家族の者や又友人とうち語らふ時、他の時には感じ難き心持を經驗す。戰場に出でたる兵士に取りて戰爭の無き日ほど樂なることはあらずと聞く。病床は一の戰場にてこの戰をなしだにせば當面の義務は終れりと云ふも差閊なければ、兩者似通ひたる心なきにあらざるべし。かゝる折節余はロボルトソン・ニコルの「人生の音信（レタアス、オン、ライフ）」の中に收められたる「夜半の茶（ミドナイト、ティ）」なる一篇を思ひ出でざることなし。或る婦人苦痛多き病氣に惱めり。時を定めて激しき發作あれども又痛みの怠る時もあり其時端なく「御茶を一つ入れましやうか」と云ひ出てゝ頓がて匙はコップの内に鳴り芳しき茶の香りは立ち昇り、油然たる靜定の情味たとへ難きものありと云へり。この婦人のものしたる一小文題して「夜半の茶」と云へりとぞ。人生何處にか慰

籍なからん。一杯の茶さへも苦痛の床邊に一味の春を點ずるにあらずや。

之にもまして一層深く嚴なるは神の現在てふ觀念なり。苟も信仰あるものならんには神の攝理と云ふことを思はざるはなからん。然れども重き病を看護する時など偏に思ふは神の攝理てふことに止まらずして神の現在てふことなり。余は其の時日記に記しぬ。

我は神は現在てふことを今まで經驗したるよりも適切に感じたり。感謝すべきかな、神は鞭つ神、赦す神なり、畏れて仕ふべき神なり。

神の現在を感ずれば我れ畏れざるべけんや、喜ばざるべけんや、謙らざるべけんや。イザヤの如く唇の汚れたるを感ぜざるべけんや。

此の頃詩篇の第十六篇「我れ常にエホバを我が前に置けり。エホバ我が右に在せは我れ動さるゝことなかるべし。この故に我れ心は樂しみ我が榮は喜ばん」とあるあたりや、約百記第四章に「人の熟睡（うまい）する頃我れ夜の異象（ことばろし）によりて思ひ

煩ひをりける時身に恐懼を催ふし戦慄き」と書き出しある一節をはじめ、ヤコブが「誠にエホバ此の處に在すに我れ知らざりき」と云ひし創世記の物語などいづれも意味深く感じたり。別けても復活せる基督を信ずるによりて神の現在を感格すること一層切になれり。昔し病める者の床の邊に立ちて之を癒やし給ひし主耶蘇病床にある其の弟子と今も猶ほ偕に在るに非ずや。獨り不思議にも余の助らるゝ時耶蘇其處に在して愛するものゝ祈を聽き給ふのみならず、此の世より取らるゝ場合には耶蘇はともに在して其の魂を伴ふて御國に歸り給ふを信ず。當時一人の愛子を喪ひし友にこの事を書き送りて慰めしことあり。

斯く云へば連結やゝ故意らしき恐はれども、神の現在を願ふ人の心には人の現在をも亦慕ひ待つは自然の情ならずや。病みし人又病人を看護する身に取りて最も嬉しきは足を運びて見舞ひくるゝ人の情なり。病室にまで入りては却て妨となるべければとて玄關にて見舞を述べて歸る人もあれども一分時にても

よければ病人の顔を見又顔を見せて歸る人を有り難く思ふは人情なるべし。遠隔の地なれば致方なけれども同じ地に住む人なれば手紙にて問ひ慰むるよりも成るべく其の家、其病院を音づる方親切なるべし。何となれば手紙は之を答ふべき義務を負はす一事にても受くる人に一の用を增すことゝなる。之に反して親しく訪問すれば何等かの助をなす機會もあり又看護の助言をも與へ得べければなり。要するに足の親切は手の親切にまさる効果あり。されど見舞ふ人長く留まることなかれ、多人打連れて見舞ふなかれ。二三人ともに見舞ふとき病者の爲に祈らば願くば一人代りて祈らしめよ、多くの人交る〳〵祈る時その心には感謝しながらも疲勞を感ずることもやあらん。

* * * * * * *

病院に出入せし頃余は思ひぬ、醫學の進歩駸々として、一の新發見あれば病を癒やす勢力一層の强大を加ふ。固より專門の醫學者必ずしも病を診し藥を投

ずる道に於て長ぜるものにあらざるべきも、彼等の研究の進歩は卽ち人を救ふ方法の進歩なり。顧みて宗教の學問は如何。究極の目的は人の靈魂の病を癒やし之を救ふに存せずや。果して然らば神學の一進歩は卽ち世を救ひ人を救ふ勢力の進歩を意味すべき理にあらずや。是の如き方面に向て多少の研究を試みたき願は余が胸に起らざること得ざりき。(四四、二)

ヨハネ傳の宗教的價値

一

ヨハネ傳が價値ある書籍であると云ふ事は、苟くも教育ある人の異論の無い事である。たゞ此の價値ある書籍を我等自身に取りて眞に價値あるものとしなければならぬ。若しヨハネ傳と云ふ書物が無かつたならば我等はどれだけのものを失つたであらうかと云ふ事を考へるだけでもヨハネ傳の價値の幾分はわかるのであるが、この考を出來るだけ明白にすることが必要である。さうなつて來ると話が幾分か分析的になつて來て、又所謂第四福音書問題と云ふ面倒な問題とも交渉せずに濟まないことになるが、これは極めて必要な範圍だけに止めたい。つまり何處に着眼して又どのやうな心持でヨハネ傳を研究すれば最も多くの益を得べきかと云ふ實際上の問題の參考としたいのである。

價値と云ふ事にも種々種類があり要素がある。隨つてヨハネ傳の宗教的價値にしても樣々の方面から之を考へる事が出來る。第一は思想の本源としての價値である、第二は基督教の發展史上に於て占むる地位から生ずる價値である、第三は權威としての價値である、第四は我等の精神の糧としての價値である。無論此の四のものを截然區別することは出來ないが或る點までは區別して考へる事が出來る。

二

大なる書籍は思想精神の斷えざる源である。啻に歴史の或る點に於て重要な役目を果たし時期を劃したに止まらず今日も活き且つ生長しつゝある思想の本源となつて之を養ひ之を鼓吹し之を導きつゝあるのである。我等が直接之によりて養はるゝのみならず、我等の養はるゝ思想家の培養となりて我等を敎へ養ふのである。新約聖書の讀まるゝ限りヨハネ傳の感化は盡きないであらうが、其の外に又一種ヨハネ型の思想家と云ふべき人がある。其の人の性格、其人の思想の傾向に於てヨハネと血脈相通ふて居るやうな人がある。此の型の想が基督敎思想の一要素をなして居る。他の强大なる要素はパウロ型の思想であるが、之と對照すれがヨハネ型の思想の特色が鮮明に現れる。パウロ型の思想家は己の罪を感ずることが深刻であつて、從つて神の責罰を畏るゝ念が盛である。之れが神の恩により基督によりて救はるゝと云ふ方を思ふことが切である。アウガスチンやルウテルは其の型であつて、宗敎を改革し新しき元氣を注入する事

業は實際パウロ型の思想の感化から出る事が多い。然れども總ての性格、總ての經驗の人に滿足を與へ適切な敎を垂れんが爲にはパウロの思想とは變つた型の思想を要する。パウロの神學の根本思想が大體に於て基督敎の根本思想を得たものとすれば、其の思想が保羅型とは別の型の思想のうちにさへ活き得ることを示さねばならぬ。ヨハネ型の思想は其の需用を充たし得るものである。

基督敎會の神秘思想は源をヨハネの思想から發して居るものが多い。神秘的傾向を有して居る人はヨハネの思想に於て己と近きものを見出すのである。新約聖書に於ける神秘思想はひとりヨハネに限らぬ。パウロにも神秘的の處が少くない。然れどもパウロには法律的論理的の形式に入れて考へる處があつて、ヨハネほど瞑想的の一面が主となつて居らぬ。ヨハネの思想は斯かる形式を經ず神の子基督の人格を通じて直に永遠なるものに接しやうと云ふ方に向つて居る。ヂエームスが神秘思想の特色を數へたうちに言つてある如く、Ineffability

即ち曰く言ひ難しと云ふやうな事神秘思想の一特色である。表し難い境界を如何にしてか表さうとする、少しづゝ言ひ表し方を易へて言ひ難ひ事を言はうとする。其處からヨハネ傳の或る部分は單調な心持がする、同じ事を繰り返し繰り返し説いてあるやうな感がする。又晴れ渡つた空の下にあると云ふよりも光の雲のなかを歩む如く、明るいなかに何となく朦朧茫漠たる感がする。これは總ての事象を永遠の光のなかに包み去る處から生ずる。例へばパウロの書翰を讀むとパウロと手紙を出す教會又個人との交は大抵具體的に個別的に表れて居るが、ヨハネの書翰でも又福音でも著者は薄紗(ヴエール)の裡に包まれて居つて赤裸々の事實は少しも現れて居らぬのである。詩人ブラウニングはヨハネの思想に養はれヨハネの精神を了解した人である。彼がヨハネの內部的經驗を歌つた『砂漠に於ける死』、及びラザロ復活後の經驗を歌つた『アラビヤの醫者カルシシの經驗』を讀まばその事がわかるが、ブラウニングの詩の朦朧として解し難き所に

も矢張言ひ表し難い事實を言ひ表はさうとする所から生ずる。ヨハネの思想に於ける神秘と歷史的事實との關係につきても言ふべき事があるがそれは後節に讓りたい。

次にヨハネの思想には教育的倫理的の分子が多い。靈によつて生れ更る新しき生命に入ると云ふ所はパウロも之を說きヨハネも之を說くのであるが、二人の經驗の性質が違ふパウロは基督に敵對して居つたものが基督に囚へられ急激なる變化を經驗した。ヨハネは耶蘇の人格に接し其の愛に感化せられ、風の好む方に吹きて其の音を聞けども何處より來り何處に行くを知らざる如く、教育の力によりて次第に新生命に步むものとなつた。パウロやアウガスチンやバンヤンの如き人の經驗のみが基督教經驗の正しい型でない、ヨハネの如きも亦正しい型を踏んだものである。萬人之に則るべき道は前者に非ずして後者にあると云つても誤てはなからう。斯かる人は基督によりて罪を赦され救はれたと云

ふ方面のみてなく、基督が光てある、生命てある、永遠の生命の言をもてるものてあると云ふ方面を考へる。昔て云ふとアレキサンドリヤの神學者にして哲學者てあるクレメンスやオリゲネスの如きはこの型に屬する。近世米國の神學者ブシネルの如きヨハネ神學の精髄を得た人てあると云ふべきてある。彼の神學は倫理的の調子で充ちて居る。人の尊貴と云ふことが思想の中心てある。故に彼は基督敎的の敎育と云ふことを說く。我等はパウロ型の思想から學ぶべき所を學ぶとともに、此の一面を忘れてはならぬ。

猶ほ他に擧ぐべき特色がないてない、ヨハネ傳の藝術的特質の如き點も云ふことが出來るが、其れは省いて、ここにヨハネの獨特の思想を表す爲に彼が好んで用ひた語につきて概略話をしやう。其れは卽ち光と生命との二の語てあるロゴスと云ふ語もあるがそれは第四福音書の序論に出たのみて其の後は耶蘇の言のうちには全く出て居らぬ。之に反して光と生命と云ふ語は福音書と書翰の

うちに數へ難いほど出て居る。サンデイ敎授の云ひし如く、第四福音書のあらゆる奇跡を生命と光の二の項目の下に總ぶることが出來る。光と云ひ生命と云ふ言は、メシヤとかロゴスとか人の子とか云ふ如く或る國、或る時代に特有のものてなくして、殆んど世界的の語てある。宗敎家のみならず、詩人にも哲學者にも觸れ得る語てある。『特に生命と云ふ思想が現代の哲學科學文學に於て如何に重要なる地位を占めて居るかを思へ。近世流行のオイッケン、ベルグソンの名を擧ぐれば足りるのてある。ヨハネの思想に於て光と生命は如何なる意味を以て用ひられて居るか。』思想の源としてヨハネ傳の價値を研究する爲に此の點を明にする必要がある。

光と云ひ生命と云ふ語はひとりヨハネ傳のみてない、共觀福音書に載せられた耶蘇の言のうちにも出て居る。彼は『汝のうちの光もし暗からば暗き事如何に大ならずや』（馬太六、二十三）と云ひ、又『汝等は世の光なり』（馬太五、〇十四）と云ひ、又弟

子等を『光の子ども』(路加十六〇九)と呼ばれた。耶蘇自身大なる光であり又光の源であることは此等の言のうちに暗示されて居るが、明言した言がない。ヨハネ傳がこの空隙を充たして居る。又生命と云ふことも『生命を全ふせんとする者は之を喪ひ、我が爲め且つ福音の爲に生命を喪ふものは之を得べければなり』(馬可八〇三十五等)と云ひ、生命に到る路は狹し』(馬太七〇十四)とある。此處にある生命は永遠の生命、靈的生命を指すことは明白である、耶蘇は光と云ひ生命と云ふ事を語られたとすれば、此れだけでなく、もつと度々語られたと想はれる。ヨハネの深い思想は早くもこの二大思想に引き着けられた。ここに耶蘇の教の焦點を見出した、然して之を徹底せしめて歸着する所に到らしめた。光の源、生命の源は神である、神は光であり、又生命である。

如何なる意味に於て神は光であるか。第一は神の神々しく聖德限りなく光明遍照せる御稜威を示したものであらう。次には光は物を見せしむる如く神が己

れを人に知らしむることを云つたものであらう。『我を見し者は父を見しなり。』基督を知るは卽ち神を知る所以である。『我等其の榮を見るに父の生みたまひし獨子の榮にして恩と眞にて充てり』。故に基督は世の光である。神が生命であると云ふは神が自ら活ける神であるのみでなく、又宇宙の生命、別けても靈的生命の本源であることを含んで居る、基督のうちに神の生命は充ちて居る。『父によつて我が生る如く我を食ふものも我によつて生くべし』(ヨハネ傳六〇五十七)要するに神は基督によりて己を人に知らしめ、又己の生命を人に與へんとし給ふ。これがヨハネの神觀である。

ヨハネ傳には又良く信者の生活に於ける光と生命との關係を示して居る。光は神の生命より發し、光が生命の源となる耶蘇に隨ふものは生命の光を得る(八〇十二)。神と其の遣しし耶蘇基督を知ることこれ卽ち永遠の生命である(十七〇三)これは著者の實驗した所である。然して基督教の卓越點は最も良く現れて居る。基督教

は神につきて光を與へるものであるが、又我等の内に豐富なる靈的生活あらしむる宗教である。光を求めよ、永遠の生命を得よ。これ永久に新しき基督教の招きである。

三

以上はヨハネ傳と云ふ書物を思想の源として考へた。然して本源と感化の及ぶ流との距離には頓着しなかつたが、此の節に於てはヨハネ傳を基督教の歴史の一の時期に据えて前後に對する關係の上から其の價値を調べて見たいと思ふ。ヨハネ傳と云ふ書物は裾野なくして獨り高く聳えて居る書物ではない。バンヤンの天路歴程はバンヤンと云ふ驚くべき創始的人格の産物であるとともに其の根底にはピウリタンと云ふ團體の偉大なる精神、偉大なる信仰が横つて居ることを忘れてはならぬ。ヨハネ傳の根底には初代の基督教會の意識と信仰が横はつて居る。然してバンヤンの天路歴程はピウリタンの思想の發展に貢獻したかと云ふことは餘り無いかと思ふが、ヨハネ傳は基督教の思想信仰の發展に與ふる所があつた。受け且つ與へた。其の與へた點卽ちヨハネ傳の創始的方面如何と云ふ事を調べる事は困難であるが、我等には試ることが出來る。其の一面はヨハネ傳それ自身の内容に就いて之を檢することであつて其の一面はヨハネ傳が其れに接した時代の歴史に如何なる勢力を及ぼして居るかを調べることである。

ヨハネ傳は基督再來の思想に一の變化を與へて居る。基督復活して天に昇られたが久しからずして雲に乘つて現れ來りこの世の審判を行ひ己の王國を立つべしと云ふ事は原始時代の教會に於て一般に信ぜられた。又一向基督の再來がないてないかと嘲つて信者を惑はさうとした人もあつた。ヨハネは全く之と否定はなしかつたが基督の再來の精神的方面を高調した。卽ち聖靈が降つた時基督は既に世に來つたのである。ヨハネ傳はこの見地から耶蘇の言を解釋したものである。審判といふことに就きても未來の審判を無視して居る譯でないが之

とともに現在既に審判のあることを顯すことを勉て居る『信ぜざるものは既に審判れたり』。抑も基督の再來を待ち望むと云ふことは信者をして世に執着せず艱難迫害に堪え且つ謹愼警醒の精神を以て世を渡らしむる効力はあつたが、偏狹にして世を厭ふ弊を伴ふて居つて社會の進歩の爲に盡すと云ふ精神は養はれなかつた。ヨハネ傳が終末觀を精神化したことは好結果が多かつたに違ひない。

それよりも大切なるはヨハネ傳の基督觀である。ヨハネ傳は共觀福音書よりも更に進んだ時代の信仰を反映して居ることは明である。ヨハネ傳の書かれた年代については種々の議論もあるが、耶蘇の死後百年と立たぬうちに出來たものであることは略ぼ確實である。この百年立たぬうちに耶蘇に對する信仰に一大發展があつた。ハルナックが云つた如く『彼に就きて言はれ得る事は盡く初の二代に於て言はれた。否彼は永久に活ける者、世界の主、我が生命の活動的本源たりと感ぜられ知られた。……福音書の歷史がこの世界に於て示す一

群の事實は世界歷史の上にて出會ひ得る總ての事實のうち最も高く又無二なるものである。あらゆる他の世界的宗教と異ならしむるものである。之とともに飲食したりし人々が彼を崇めて神を啓示するものとするのみならず生命の主となし世界の贖主又審判者となし、猶太人と異邦人希臘人と野蠻人、賢人愚者齊しく此の人に充ちたるなかより受けた恩に恩を加へらると告白す。人類の歷史に於て之に似寄つた事があるであらうか』。或人は共觀福音書の耶蘇は人らしい人格であるが第四福音書の耶蘇は人間以上の人格である。基督論を決する基礎も共觀福音書にのみ限局し共觀福音のうちても最古の傳說にのみ限り、こゝに純人間的預言者的の耶蘇を見出したいと試みたが、それは失敗に歸した。共觀福音書の耶蘇でも矢張不思議なる人格である「人の子」は神殿よりも大なるものである、安息日に主たるものである、ヨナ、ソロモンよりも大なるものである、彼れの弟子は彼の弟子たるにより人のうちの最大なるバプテスマのヨハネ

よりも大なるものとなつた。彼を受くるものは神を受くる者である。父の外に子を識るものなく子及び子の現すものゝ外父を知る者がない。こゝに依然として神的たる耶蘇がある。(フリッ、バルト Fritz Barth の『ヨハネ傳及び共觀福音書の耶蘇』には簡明に此の問題を論じて居る。)然れども共觀福音書の方では現すが如く包むが如く隱約の間に漏れ來るとはヨハネ傳の方で之を反射せしめて耶蘇の歷史の全面に注ぎかけた。たとへば天井の一部分に光が點されて他の部分は暗いのであるが疊の上に大な鏡でも置いて其の光を反射せしめたならば天井全體が光くなるであらう。共觀福音書では永遠の光が或る機會に漏れて來るが、ヨハネ傳では總ての事永遠の光のなかに包まれて居る、永遠の背景の上に描かれて居る。耶蘇がメシヤである人の子であると云ふやうな猶太的の聯想や傳說の型は取り去られて、神の唯一子卽ち完全に神を啓示し神と完全な交通を保てる神の子の御姿が玲瓏として描き出されてある。然して神は永遠の先より

存在せるロゴスの顯現であると書いてあるが、耶蘇が生れぬ先から存在して居つたと云ふ信仰はヨハネが希臘哲學から得來つたものであるか或はパウロの神學の感化に因るか孰にしても耶蘇の敎にはないことであると考へる人もある。然れども耶蘇先在の敎理は、パウロ未だ出でず希臘哲學の感化また敎會に及ぶべくもあらぬ早き時代に起つたものであることはワイッゼッケルやヴエルンレの如き學者でも認める所である。果して然らば實に驚くべきである。共觀福音書に記されたる耶蘇でさへも著しく疑ひなく且つ力ある人格であつて、この人格の秘義を考へつつ全生涯を送つた弟子に取りては耶蘇をロゴスの成肉身と信する信仰の出て來るのは必然であるとはワイッゼッケル等の研究の歸着した點である。

要するに『第四福音書に現れた基督の人格に關する敎理は新約聖書の文學のうちにて最も充實せる又最も豐富なるものである』(ストーン、シムプソン『神との交通』)。然して基

督教の中心は基督であると云ふことが最も鮮明に表明された。信仰と云ふことも
もヨハネ傳の信仰は專ら基督との交通である。基督我等の中に居り、我等基督
のうちに居る心の活動を指すのである。

ヨハネ傳の出た事は基督教の歴史に如何なる影響を及ぼしたか。これは隨分
困難な問題である。ここにアーネストスコットの言を引用しやう。

『第二第三世紀に於て基督教を動搖せしも勢力の多かつたなかに於て基督教が
忠實に根原の性質を守り得たのはヨハネ福音書の感化の勢力に負ふ所多大で
ある。原始時代の傳説が時に亡せんとする危險に瀕せしときこの偉大なる教
師は新に之を主張し、新にして且つ活ける形式を以て之を現した。彼は使徒
時代の全使命を集めて之を一個窮極的の言ひ表はしを與へた。』

『基督教は西方國民の了解し得る思想言語の形式を以て彼等に提示せられ得る
やうになつた。然のみならずして今後基督教を富ますべき新勢力と相結ぶこ

ととなつた。五百年間の希臘の思想を承繼するものとなつた。斯くて時代一
般の教養のうちに土着し、自己の精神を以て益々其のうちに入り込んだ。次
の三百年間の進歩につきては教會は他の教師よりも第四福音書の著者に負ふ
所多い。彼は新しき宗教を猶大の土壤より移して之を一層深く根を下し自由
に枝を出し得る新土壤に植えた。』

四

上の箇條の下に言ふべき事はまだ盡きない。ヨハネ傳は何の地方で初めて讀
まれたか、又最初の讀者にどのやうな印象感化を與へたかと云ふことを調べる
のは私どもに取つてなか〳〵面白い研究ではあるが、斯る研究は多少基督教初
代の歴史の知識を要するものであつて、斯かる場で話すには餘り專門的になる
恐れがあるからこれは省くことにしよう。然して次に權威としてヨハネ傳の價
値に及びたい。ヨハネ傳はたゞ思想の本源であるのみならず、時代を劃した書

であるのみならず、基督教の經典の一部である、我等の據り遵ふべき權威である我等は進んでこの性質の價値を明にしなければならぬ。然るにこれはヨハネ傳の著者の問題や歴史的價値の問題と關係して居るからなか〳〵範圍の廣い面倒な問題になつて來る。たゞ極めて小部分を語るに止めなければならない。

著者が使徒ヨハネが老年まで活きて居つて晩年此の福音書を書いたとすれば隨分面白い事であるが、もし著者がヨハネでなかつたならば、權威として此の書の價値は無くなるであらうかと云ふにさうでない。親しく耶蘇に接した人の作であれば耶蘇の言行の記錄として價値あるものである。然してヨハネ傳は兎に角親しく耶蘇に接した人でなければ書けないと思ふ。又使徒ヨハネであるにしても、彼が耶蘇の言行をそのまゝに傳へず自身の用語や思想を自由に書き込んだものであるとすれば權威としての價値に多少の相違を生じて來るのであるがこの點は如何であるか。著者は隨分大膽な書き方をして居る。ニコデモでも或

はギリシャ人でも耶蘇の會話の結末まで書かずに、主要な精神さへ現せば後は放棄すると云ふやうな書き振りである。又何時の間にか耶蘇の言說でなく著者の文章になつて居る處もある。別の時に話された言を類集してある所もある。著者自身の用語を用ひてゐる所もある。然るに一方には又細心な所もある。例へば序論の中には耶蘇をロゴスと云つてある所があるけれども耶蘇自身の言のうちにはロゴスに云ふ語を用ひられたことはない。又書翰のうちには耶蘇の死を「なだめの供物」propitiation であると解釋してあるが、耶蘇の言のうちへその考を入れてない。事實の上から云つても共觀福音書よりも却て正しいと思はるゝ事もある。宮を淨められた時や、十字架にかゝられた日の問題の如きそれである。かくて問題が色々込み入つて來る。私はヨハネ傳の使徒ヨハネの作とすることには困難のあることを認むるが、外部的證明のなか〳〵有力な點などに照して縱ひ使徒ヨハネ自分は筆を執らずとも矢張ヨハネから出たものであると信